海の道むなかた館　平成30年度
館長講座「日本古代史の諸問題」第3回

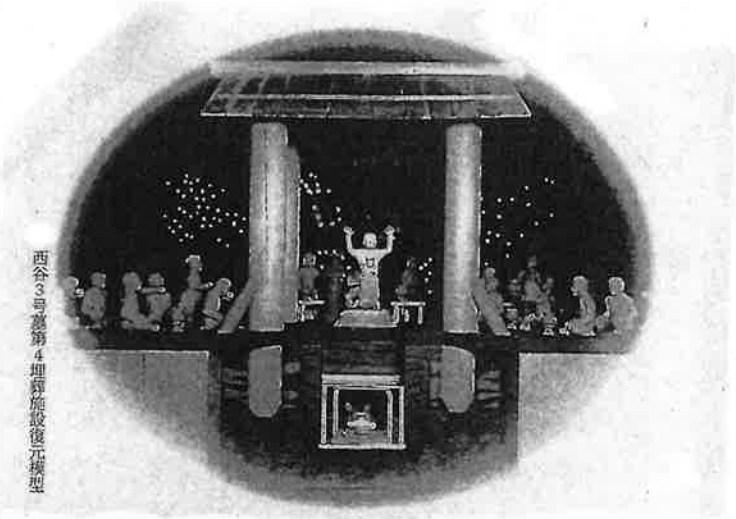
平成30年6月3日(日)

海の道むなかた館長　西谷　正

墳丘墓と前方後円墳

Ⅰ　はじめに
　弥生時代の国王墓から古墳時代の縣主墳へ

Ⅱ　日本列島各地の墳丘墓と前方後円墳
（1）筑紫
（2）出雲・伯耆・因幡
（3）丹後
（4）吉備
（5）讃岐・阿波
（6）播磨
（7）摂津・河内
（8）大和
（9）尾張・美濃
（10）毛野


西谷3号墓第4埋葬施設復元模型

Ⅲ　邪馬台国からヤマト王権へ
　箸墓古墳の築造

Ⅳ　おわりに
　ヤマト王権の成立過程

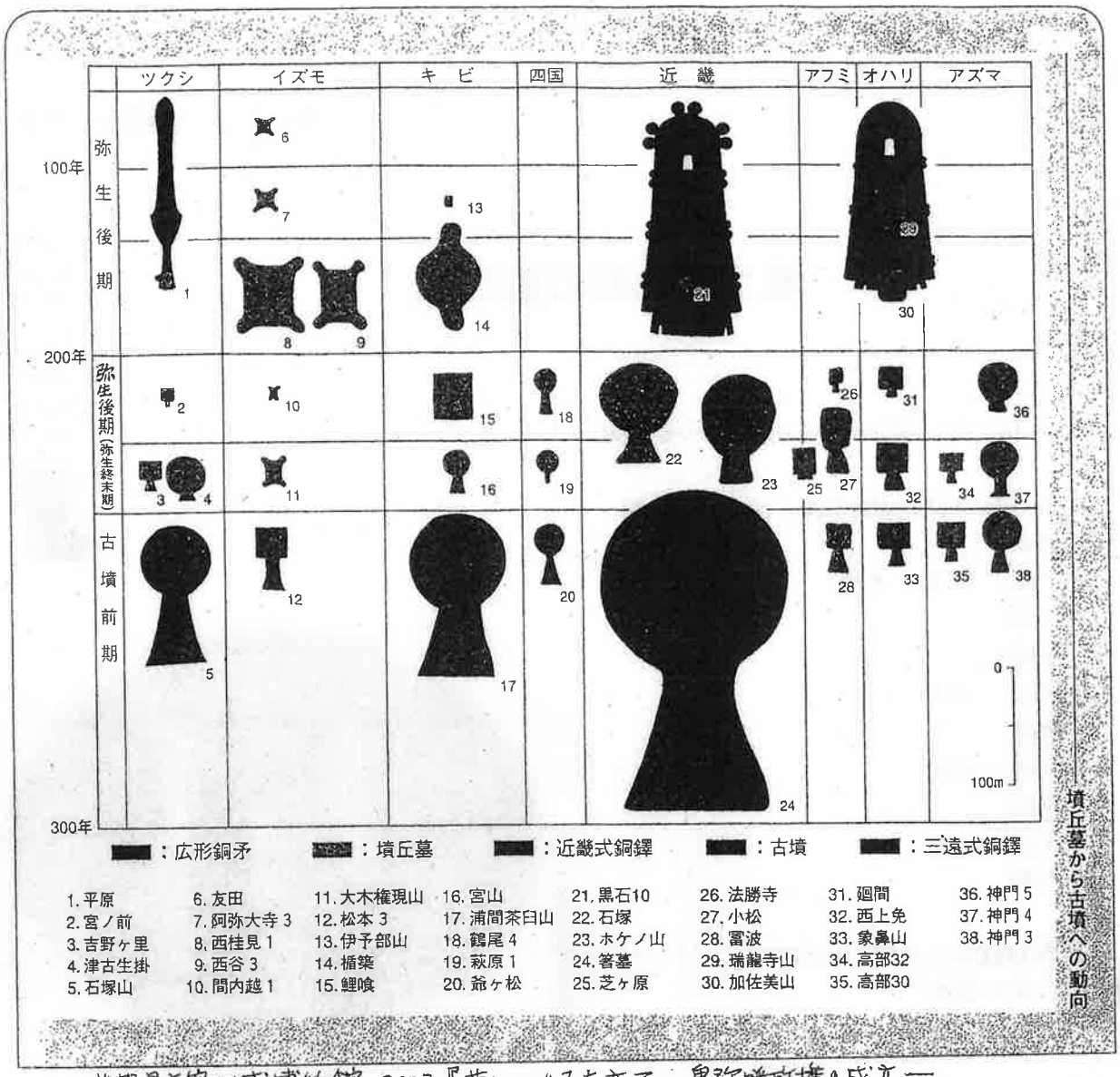
同型鏡：京都府大田南5号墳「青龍三年」鏡

銘文
青龍三年　顔氏作鏡成文章　左龍右虎辟不詳
朱爵玄武順陰陽　八子九孫治中央　壽如金石宜侯王
※銘文は39文字右回り。
滋賀県教育委員会2000『安満宮山古墳』による。

直径17.4cm

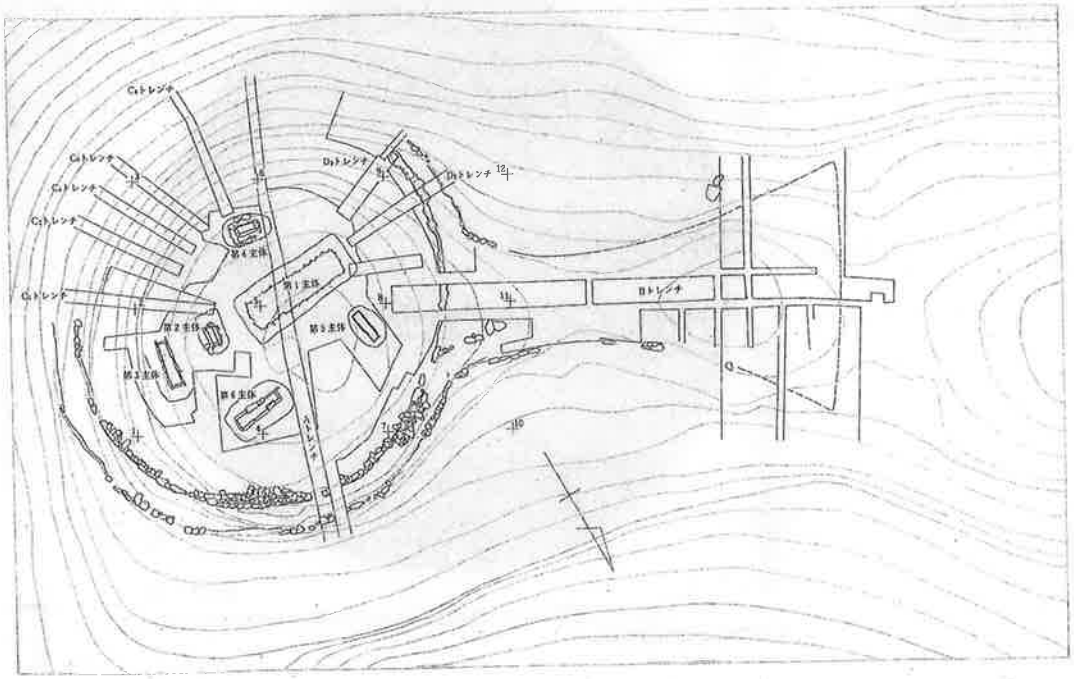
「青龍三年」方格規矩四神鏡（2号鏡）（重要文化財・文化庁保管）
※高槻市教育委員会写真提供

【お知らせ】
次回の館長講座は7月8日(日)13：30～(2時間程度) 講義室にて開催いたします。

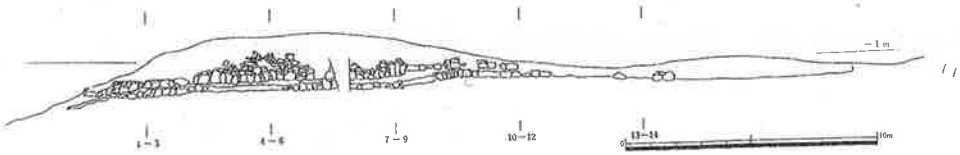


墳丘墓から古墳への動向

滋賀県立安土城博物館，2002『共に一女子を立て―卑弥呼政権の成立―』

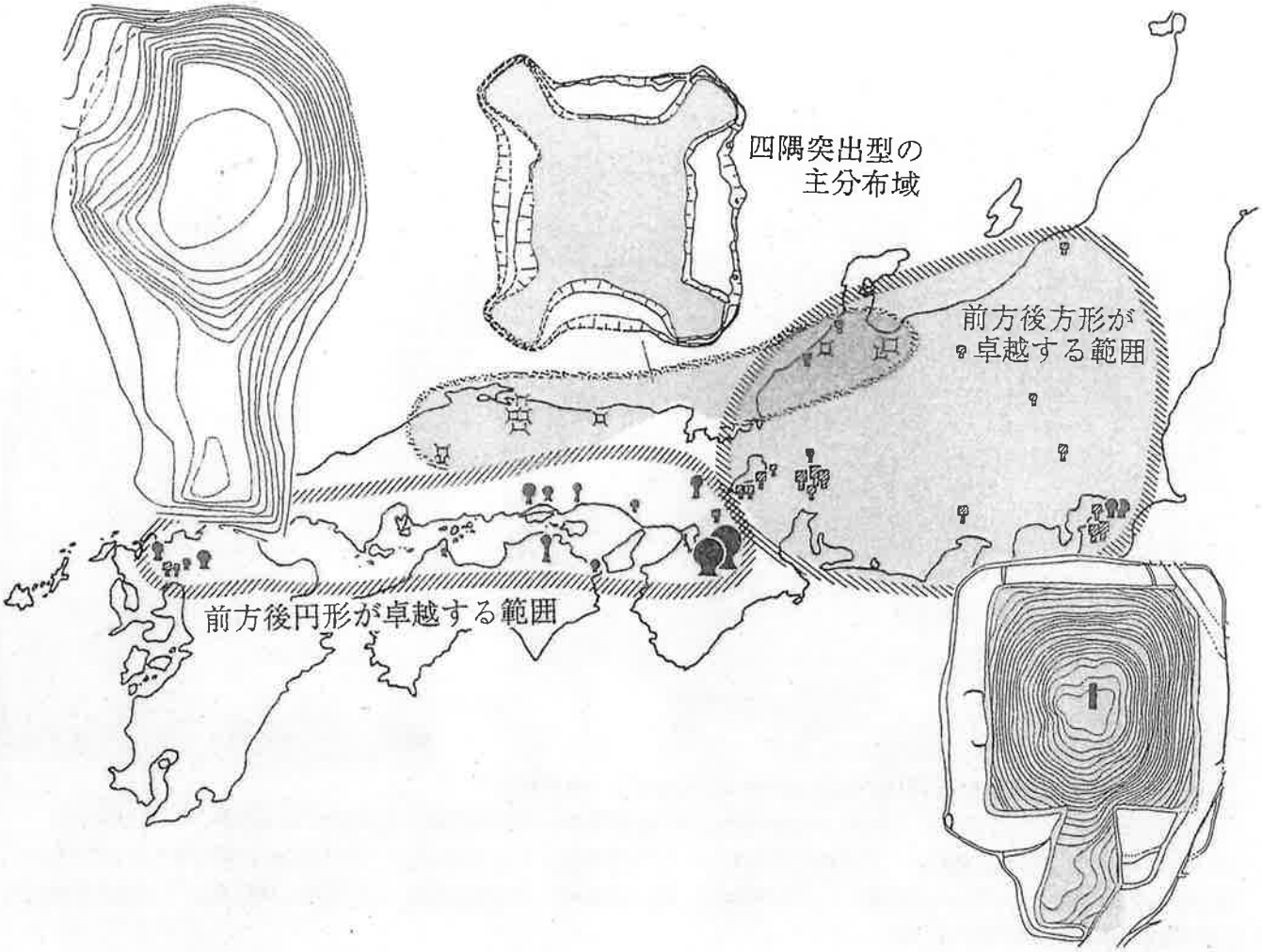


兵庫県揖保川町教育委員会，一九八五『養久山墳墓群』

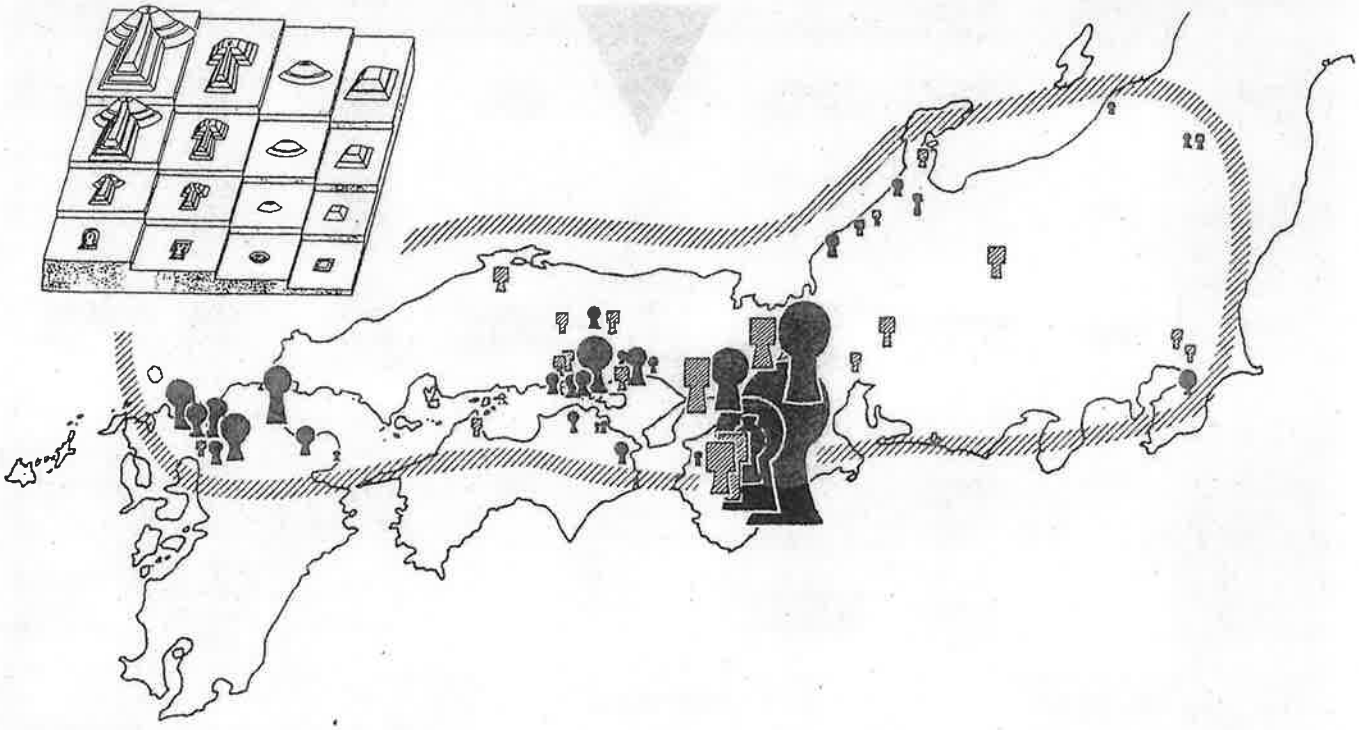


1号墳　発掘関係図

弥生時代後期～終末期

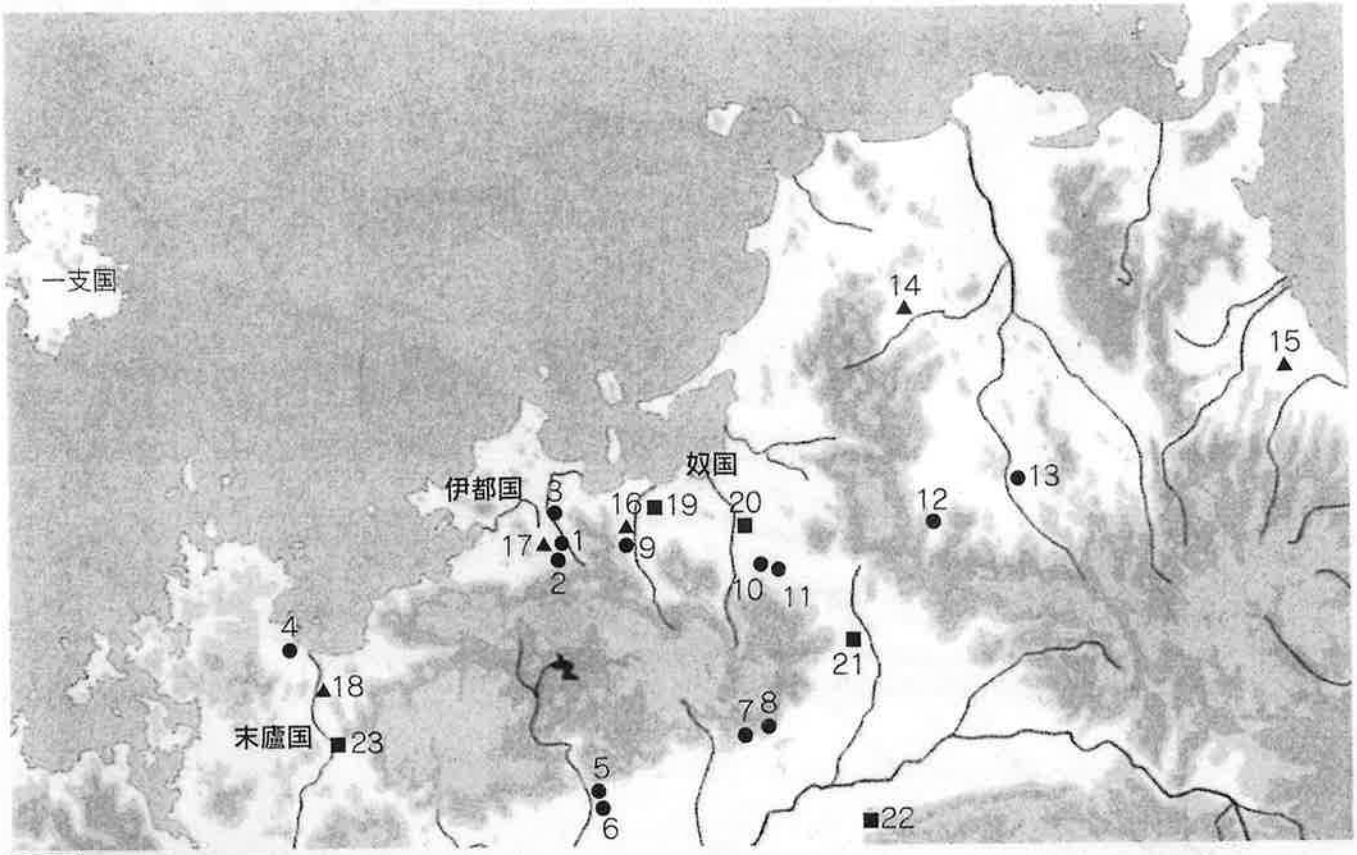


古墳時代前期



墳墓からみた弥生時代から古墳時代への変化

大阪府立近つ飛鳥博物館，2017『東国尾張とヤマト王権―考古学からみた狗奴国と尾張連氏―』春季特別展



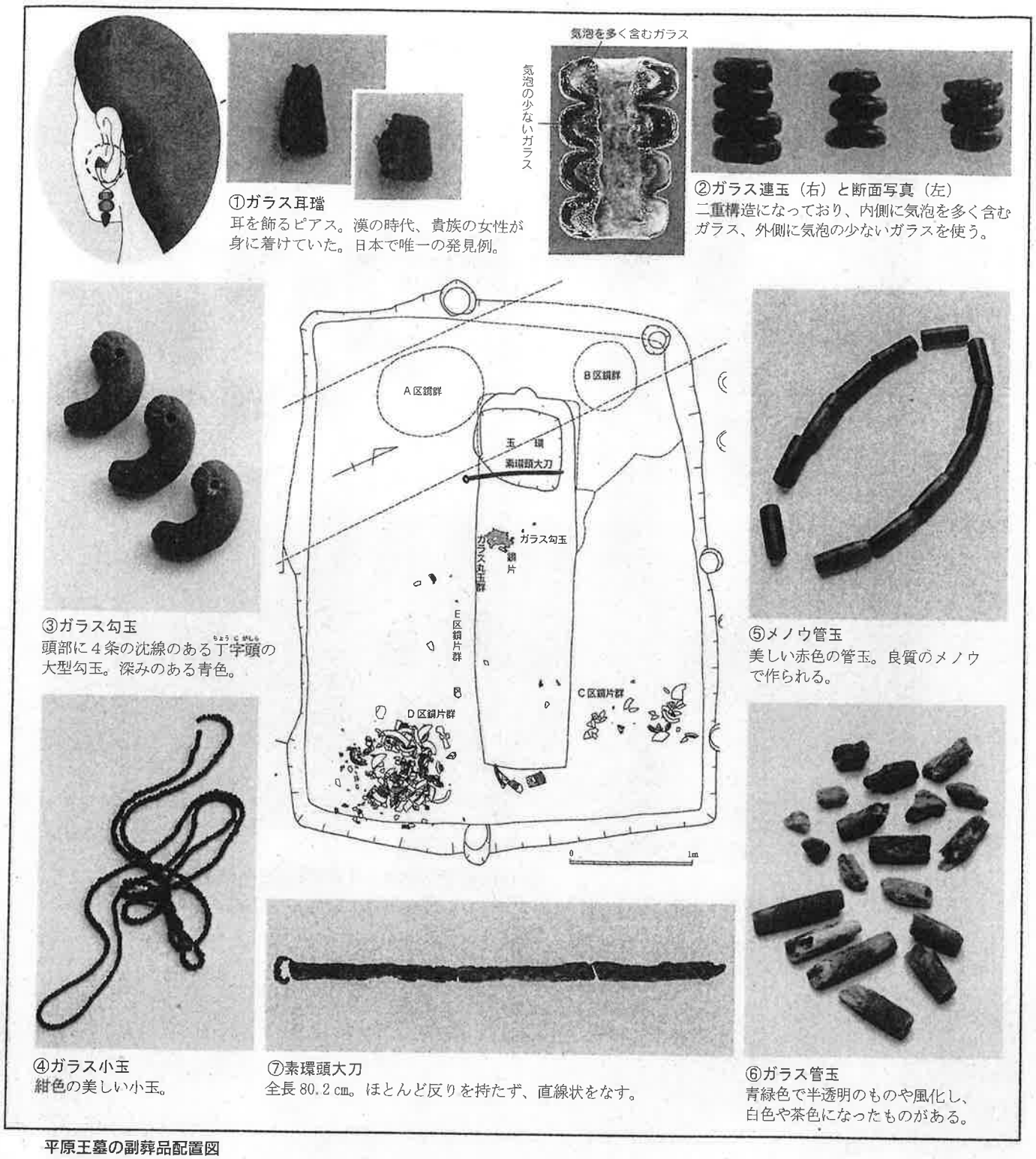
5-1 本展で取り扱う遺跡とその位置（●弥生時代中・後期　▲弥生終末　■古墳初頭）

1 三雲南小路遺跡　2 三雲ヤリミゾ遺跡　3 飯氏遺跡　4 桜馬場遺跡　5 惣座遺跡　6 尼寺一本松遺跡　7 三津遺跡群　8 二塚山遺跡　9 吉武樋渡遺跡　10 須玖岡本遺跡　11 松添遺跡　12 向田遺跡　13 立岩堀田遺跡　14 汐井掛遺跡　15 徳永川ノ上遺跡　16 野方中原遺跡　17 平原遺跡　18 中原遺跡　19 藤崎遺跡　20 那珂八幡古墳　21 津古生掛古墳　22 祇園山古墳　23 久里双水古墳

時期	唐津（末盧国）	糸島（伊都国）	早良	福岡（奴国）	嘉穂	佐賀	筑紫	周縁地域その他
弥生中期後半（前）	中原	**三雲南小路王墓**	吉武樋渡 東入部・岸田	**須玖岡本王墓D地点** 上月隈 安徳台	立岩 鎌田原	吉野ヶ里 墳丘墓	東小田峯 隈	吹上（日田） 富の原（大村）
弥生中期後半（後）	中原		有田117次 丸尾台 浦江谷	門田 弥永原	立岩	二塚山 柚比	立明寺 道場山	
弥生後期前半	桜馬場	**井原鑓溝王墓** 井原ヤリミゾ	有田117次 西新町 浦江谷	須玖岡本B地点 宝満尾 松添 宮ノ下 弥永原	五穀神社 笹原石棺墓	二塚山 三津永田 石動四本松 尼寺一本松	道場山 吉ヶ浦	塔の首S－3 （対馬）
弥生後期後半	中原	飯氏K-7 井原ヤリミゾ **平原王墓** 泊熊野	野方塚原	日佐原	原田S－1 向田	松葉 横田 椛島山 原古賀 城原三本谷	宗石	原ノ久保（壱岐） 前田山（京都）
弥生終末古墳初頭		東二塚 東五反田 三雲寺口S-2	野方中原S-3 野方塚原K-2				良積K-16 良積K-14 良積K-20 祇園山	徳永川ノ上（京都） 汐井掛（宮若）
古墳前期	久里双水古墳			那珂八幡古墳				

北部九州各地の王（首長）墓とその時期（常松幹雄 2012 表1を一部改変して作成、赤字は本展で取り扱う主要な遺跡。）

伊都国歴史博物館，2016『王の鏡～平原王墓とその時代～』秋季特別展図録



①ガラス耳璫
耳を飾るピアス。漢の時代、貴族の女性が身に着けていた。日本で唯一の発見例。

②ガラス連玉（右）と断面写真（左）
二重構造になっており、内側に気泡を多く含むガラス、外側に気泡の少ないガラスを使う。

③ガラス勾玉
頭部に４条の沈線のある丁字頭（ちょうじがしら）の大型勾玉。深みのある青色。

⑤メノウ管玉
美しい赤色の管玉。良質のメノウで作られる。

④ガラス小玉
紺色の美しい小玉。

⑦素環頭大刀
全長 80.2 ㎝。ほとんど反りを持たず、直線状をなす。

⑥ガラス管玉
青緑色で半透明のものや風化し、白色や茶色になったものがある。

平原王墓の副葬品配置図

平原王墓

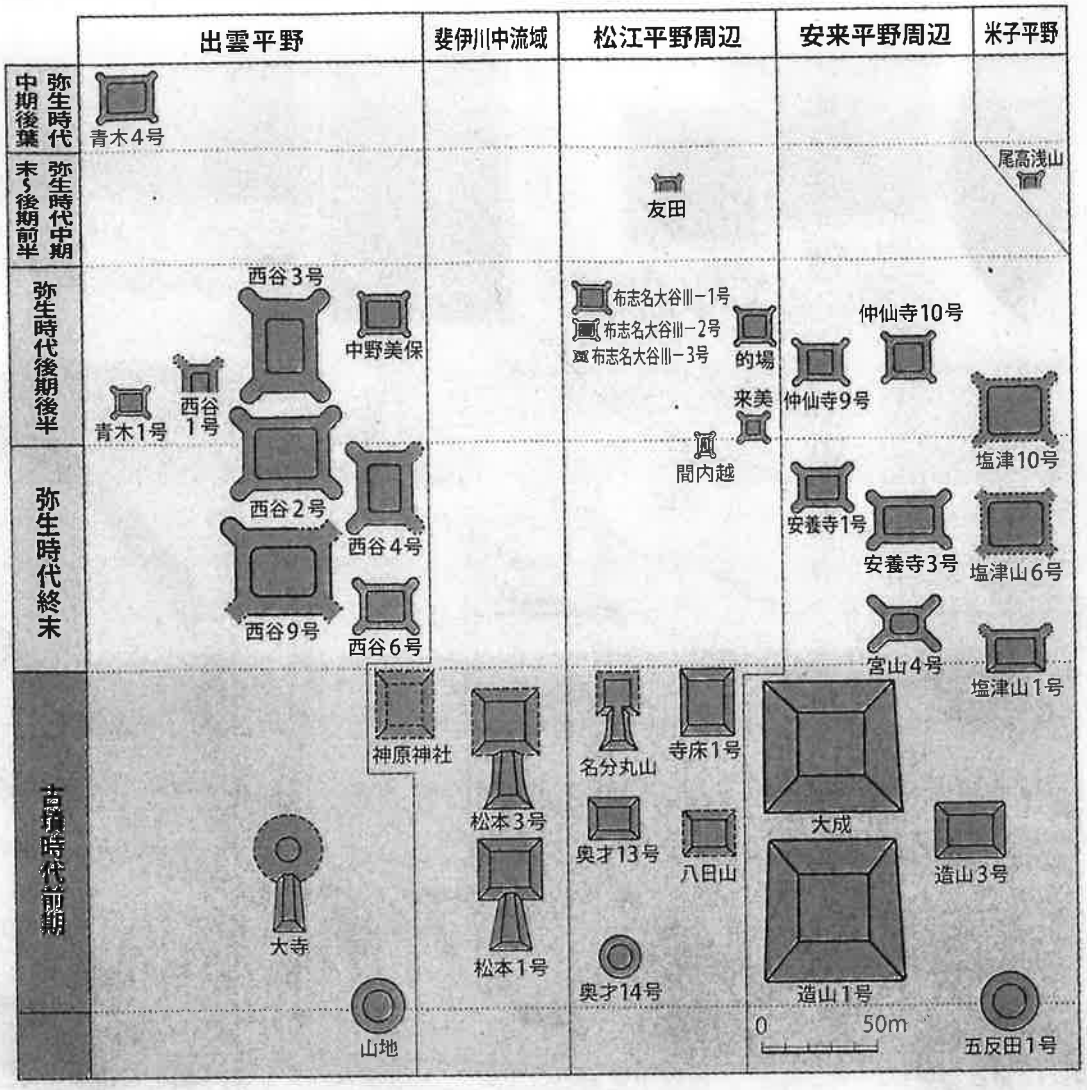
これまでの伊都国の王墓は、三雲・井原遺跡にありましたが、最後の王墓ともされる平原1号墓は三雲・井原遺跡の西側にある曽根丘陵に築かれます。

平原1号墓は昭和40年に発見された遺跡で、東西14m、南北10mの長方形の墳丘をもち、周溝がめぐります。墳丘のやや北東側に主体部があり、割竹形木棺を据えた痕跡が確認されています。

棺内には勾玉や管玉などの玉類を納め、墓壙の四隅と木棺の足元付近の五か所から銅鏡が出土していますが、その多くは破砕された状況で出土しています。銅鏡は方格規矩鏡を主体とした40面が確認され、そのうちの5面は直径46.5㎝、重さ約8kgの超大型内行花文鏡です。これらが製作された場所や年代、王墓で執り行われた銅鏡破砕祭祀の実態等不明な点も多くあり、謎を秘めた遺跡といえます。

現在、遺跡は国指定史跡、出土品は一括して国宝に指定されています。

糸島市教育委員会，2016『倭国誕生―伊都国から邪馬台国へ―』第2回伊都国フォーラム



出雲における弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓

（島根県教育委員会・朝日新聞社 1997 を改変）

大阪府立近つ飛鳥博物館，2015『古代出雲とヤマト王権』平成27年度春季特別展

出雲における西の「王」、東の「王」

汀線は奈良・平安時代（8～9世紀）の推定線を参考に作成

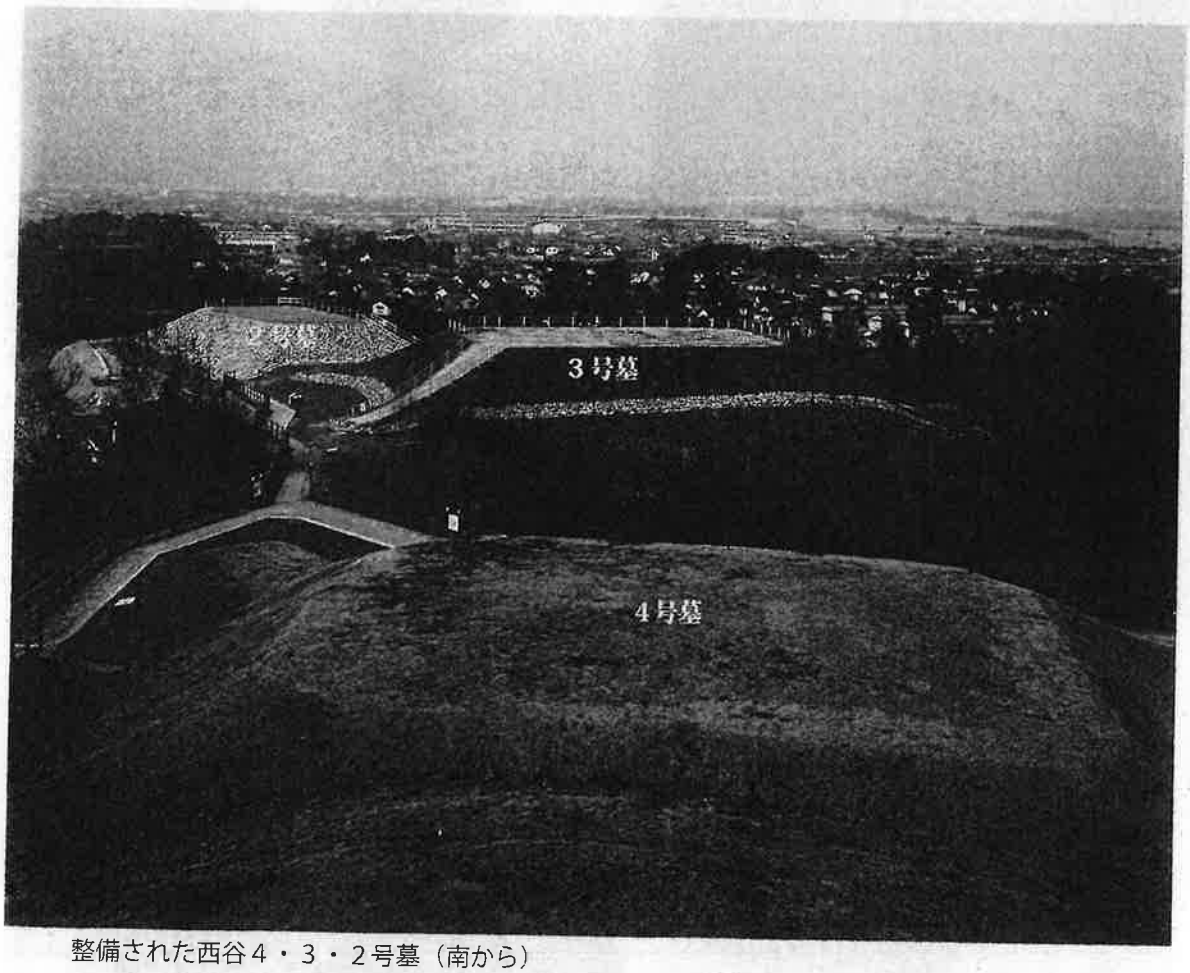
島根県立古代出雲博物館，2007『弥生王墓誕生―出雲に王が誕生したとき―』企画展図録

西谷（にしだに）墳墓群〔史跡〕と西谷三号墓

弥生時代後期後葉〜末　島根県出雲市大津町

西谷墳墓群は、出雲西部の斐伊川（ひいがわ）流域に所在し、弥生時代の王墓と考えられる大型四隅突出型墳丘墓を含む遺跡です。島根大学などによる長期的な発掘調査が行われ、平成一二年（二〇〇〇）に国史跡になりました。墳墓群で最初に造られたと考えられるのが三号墓（一辺五五㍍）です。墳頂でみつかった二基の埋葬施設で木槨に覆われた木棺が確認されました。西側の埋葬施設では、鉄剣や玉類、東側の埋葬施設では珍しい形のガラス製勾玉や碧玉製管玉などが副葬されており、前者に男王、後者に女王が葬られていたとする考えもあります。また、墓上の儀礼に伴う三〇〇個以上の土器の中には、山陰の土器だけでなく、吉備から運ばれた立坂型の特殊器台・特殊壺や、北陸から丹後地方の土器も含まれます。また、西側の埋葬施設上では、直径一㍍以上、深さ一㍍ほどの掘方をもつ四つの柱穴による墓上施設の存在が明らかになりました。時期は、弥生時代後期後葉、二世紀後半頃と考えられます。西谷三号墓は、規模や副葬品の質量とも、同時期やそれまでの四隅突出型墳丘墓と大きな差があり、出雲の王墓と考えられています。

西谷墳墓群では三号墓に続き、二→四（もしくは四→二）→九号墓の順で「王墓」とされる大型の四隅突出型墳丘墓が築かれ、弥生時代後期における出雲最大の勢力の存在が推定されています。最後の九号墓は、それまでとは別の尾根に築かれますが、六〇×五五㍍と日本最大の四隅突出型墳丘墓です。しかし、この九号墓を最後に西谷墳墓群における大型の四隅突出型墳丘墓の築造が停止します。そして、西谷墳墓群が位置する出雲平野では、後続するような古墳時代前期の古墳もみられません。西谷墳墓群では四隅突出型墳丘墓の築造が終了した後にも、小規模な方墳や円墳の築造がみられ、墓域としての機能は継続的に持っていたようですが、それまでとは大きく異なる状況がうかがえます。

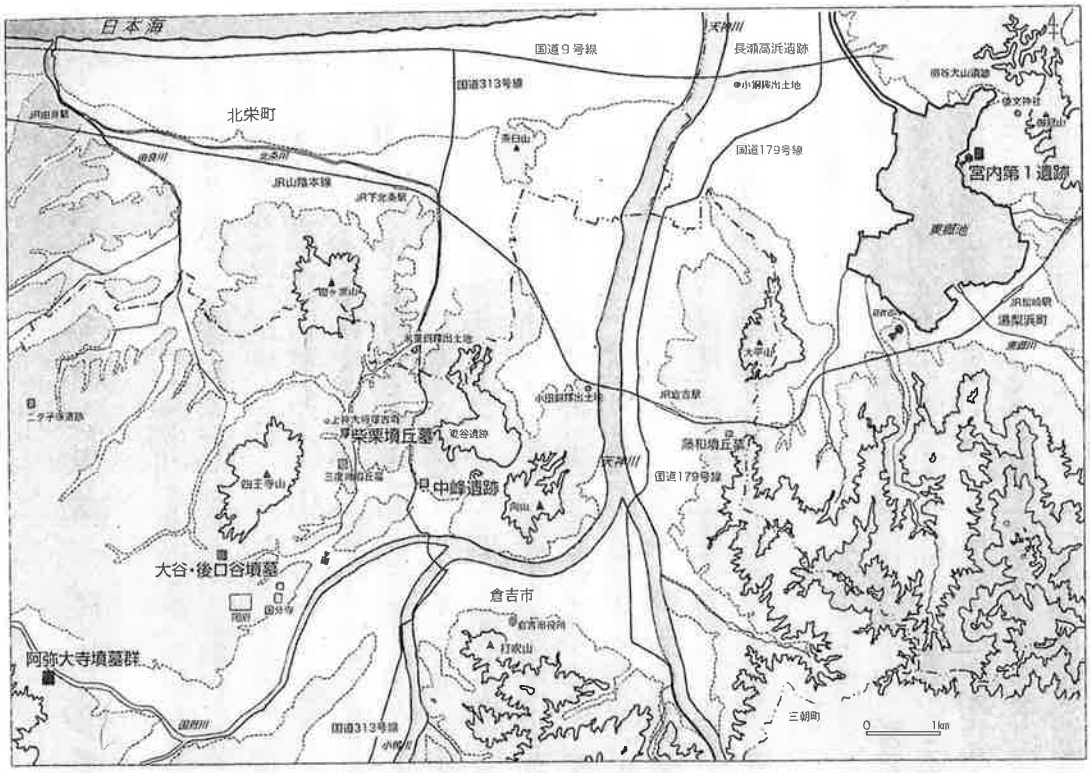


整備された西谷４・３・２号墓（南から）

大阪市立近つ飛鳥博物館，2015『古代出雲とヤマト王権』平成27年度春季特別展

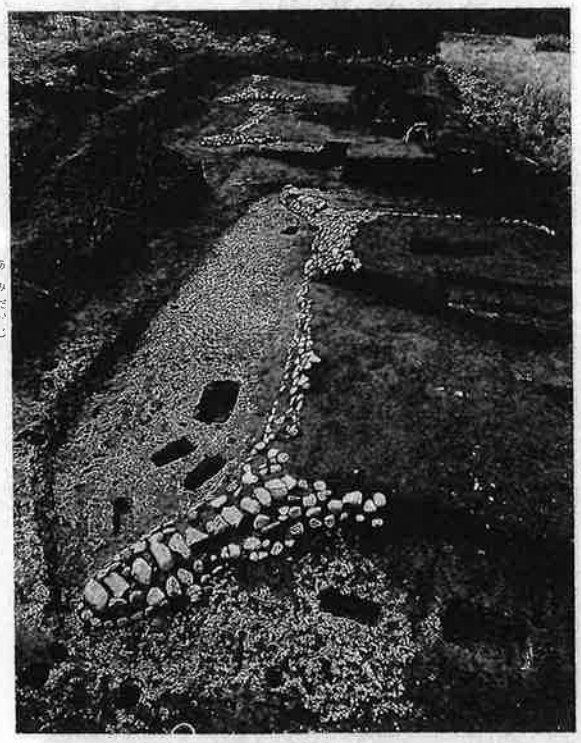
山陰の中の多様性

東伯耆の弥生墳墓



東伯耆地域の弥生墳墓の位置図
湖山池東岸に王墓・宮内第1遺跡が造られるが、内陸の国府川の流域には中小の墳墓が造られている。

柴栗墳墓（倉吉市）出土・土器（器台と小型壺）／弥生後期中葉
一辺7メートルの小型の四隅突出型墳丘墓から出土した。



阿弥大寺墳墓群（倉吉市・手前が1号墓）／弥生後期中葉
1号墓は長辺13・6メートルの小型の四隅突出型墳丘墓であるが、突出部は細長く突き出している。

阿弥大寺墳墓群出土・土器／弥生後期中葉

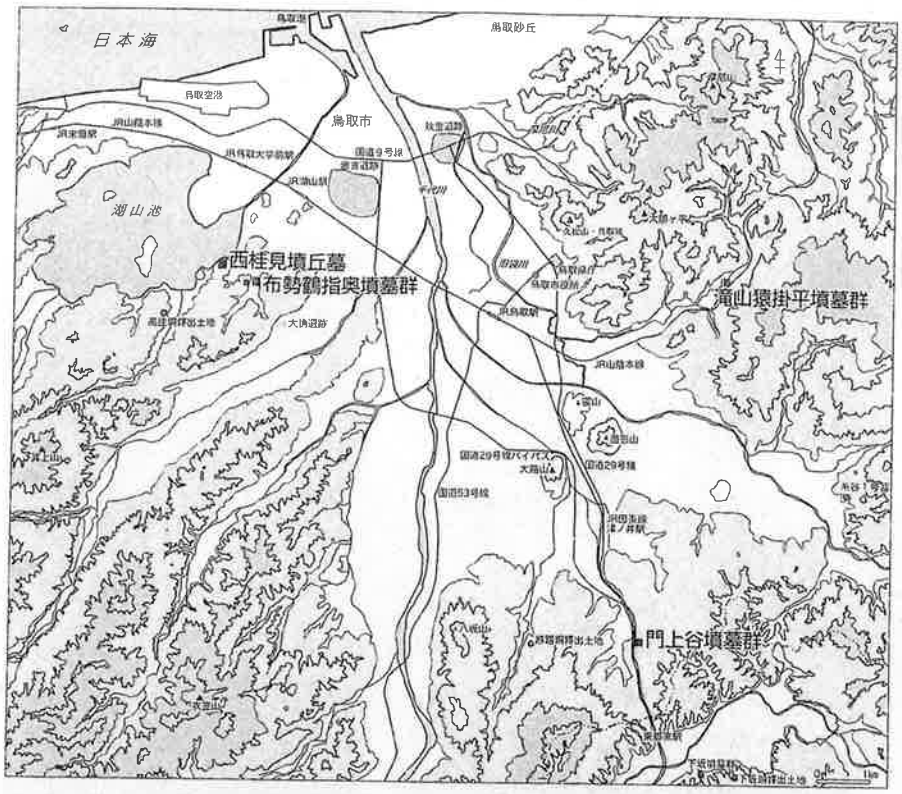
大谷・後口谷墳墓群（倉吉市）を上空から見る
1号墓は貼石を持たない一辺16×12メートルの方形台状墓である。

大谷・後口谷墳墓群出土土器／弥生後期後葉
墓上での祭祀には吉備系の大型壺（最後尾）も使われていた。

次頁の写真提供：倉吉市立倉吉博物館

島根県立古代出雲歴史博物館，2007『弥生王墓誕生―出雲に王が誕生したとき―』企画展図録

山陰の中の多様性
因幡地域の弥生墳墓



鳥取平野の弥生墳墓の位置図
湖山池南東岸に有力な墳墓が集中する。

滝山猿掛平墳墓群（鳥取市）全景／弥生後期中葉
鳥取平野から東の但馬に向かう谷間を見下ろす丘陵に立地している。
写真提供：鳥取市教育委員会

滝山猿掛平1号墓／弥生後期中葉
埋葬施設上の土器出土状況
写真提供：鳥取市教育委員会

布勢鶴指奥1号墓（鳥取市）全景／弥生後期中葉
写真提供：鳥取県埋蔵文化財センター

因幡地域では湖山池の南東岸に有力な墳墓が造られている。後期中葉には埋葬施設に木槨木棺を納める布勢鶴指奥1号墓が造られ、次代には王墓である西桂見墳墓が登場する。

一方、鳥取平野東部では中小規模の墳墓が点在して造られており、有力な墳墓は少ないが、その中で門上谷墳墓群は注目されるものである。門上谷1号墓は後期中葉に造られた長辺24メートル、短辺18メートルの中型墳墓であるが、埋葬施設には舟底状木棺を納め、副葬品として大型のガラス勾玉12個や鉄剣1振が見つかっている。さらに埋葬施設に撒かれた水銀朱は中国産であり、墓上祭祀には北陸、吉備、河内など各地の土器も使われており、各地との交易に携わった有力者の奥津城と考えられる。

布勢鶴指奥墳墓群SX－05出土土器／弥生後期中葉

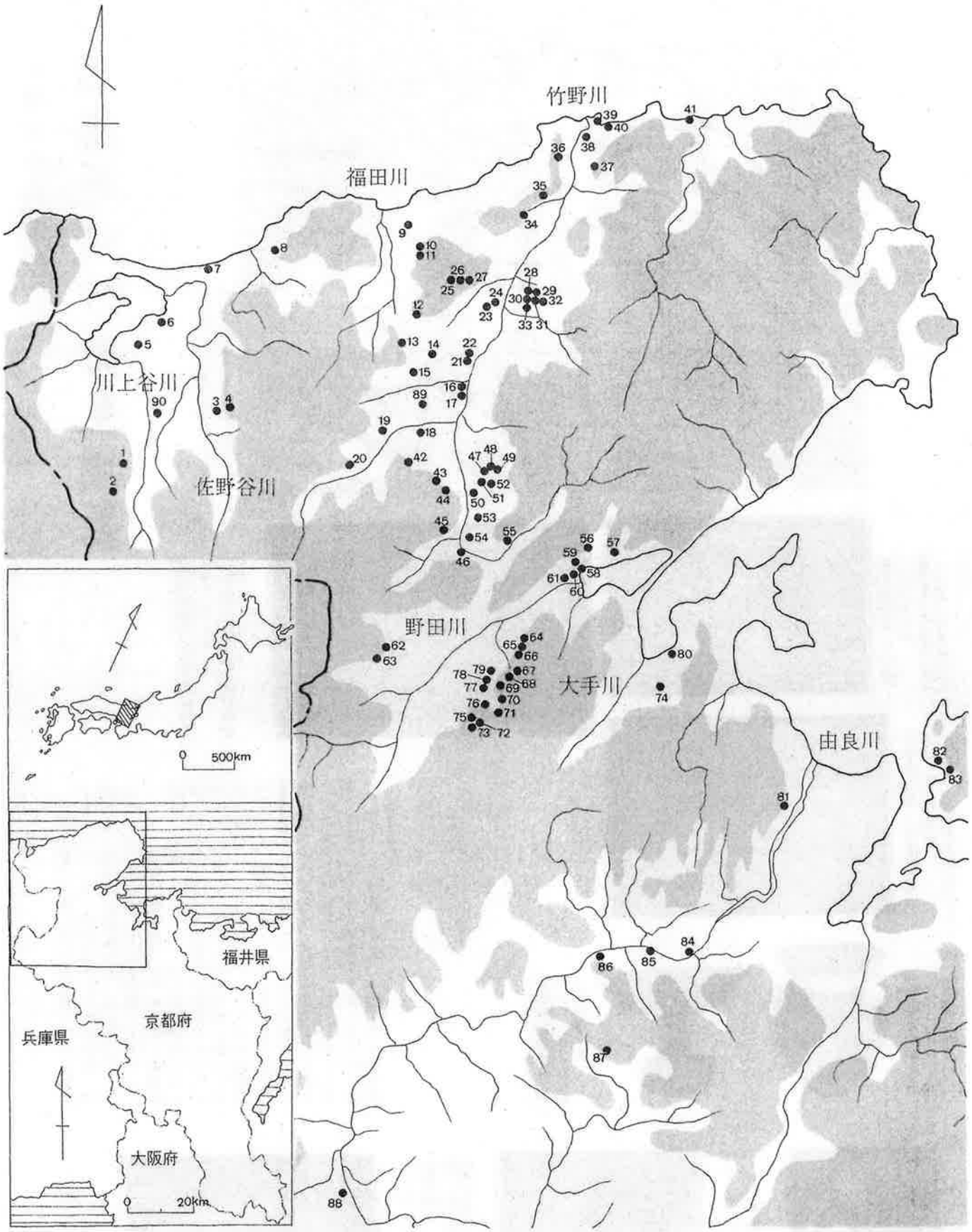
布勢鶴指奥墳墓群SX－17出土土器／弥生後期中葉

門上谷墳墓群（鳥取市）全景／弥生後期中葉
写真提供：鳥取市教育委員会

門上谷1号墓第1埋葬施設の副葬品出土状況／弥生後期中葉
頭部～胸元には水銀朱が撒かれ、首飾りに使われたガラス管玉が残る。
写真提供：鳥取市教育委員会

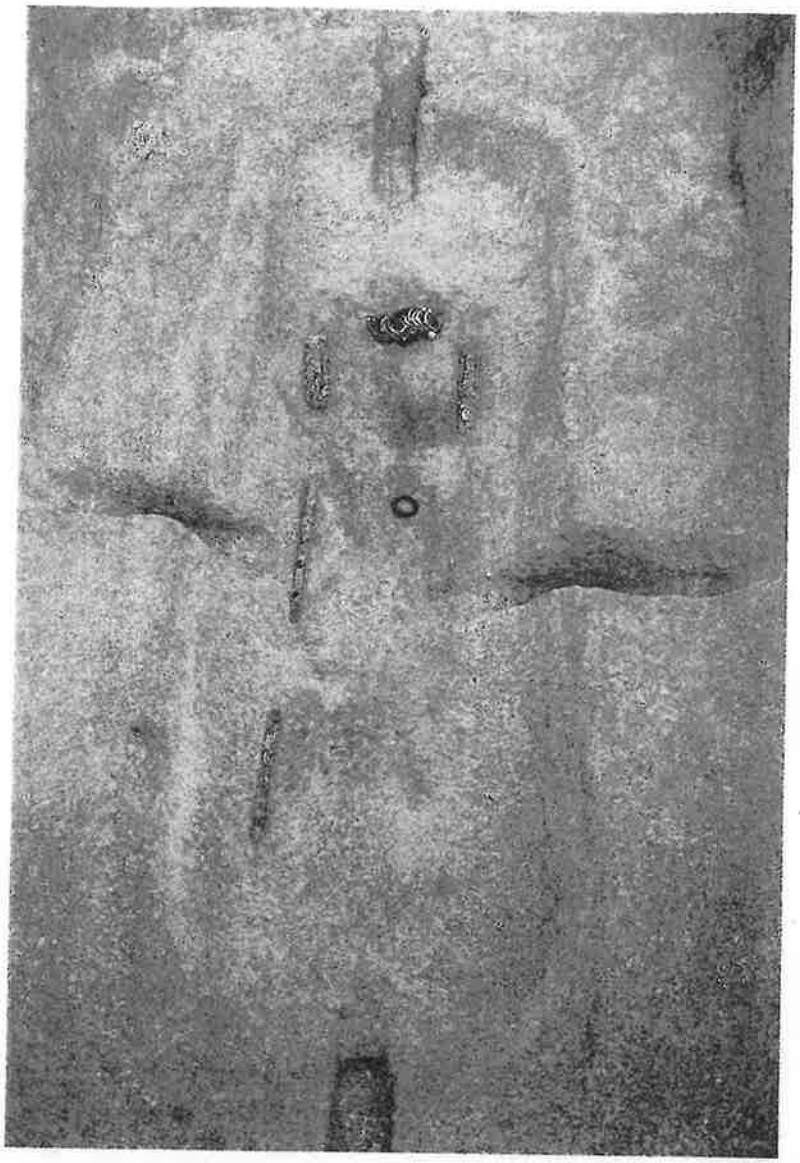
門上谷1号墓出土北陸系土器／弥生後期中葉
写真提供：鳥取県立博物館

島根県立古代出雲歴史博物館，2007『弥生王墓誕生－出雲に王が誕生したとき－』企画展図録

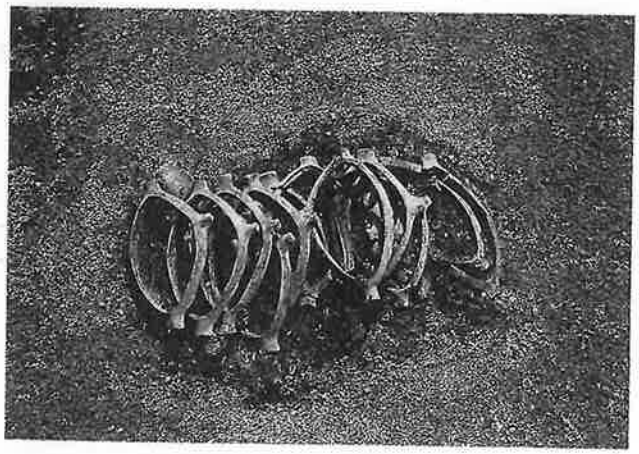


丹後における主要な発掘調査

広瀬和雄，2000「弥生墳墓と巨大古墳の特質」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』『季刊考古学』別冊



大風呂南１号墓の主体部

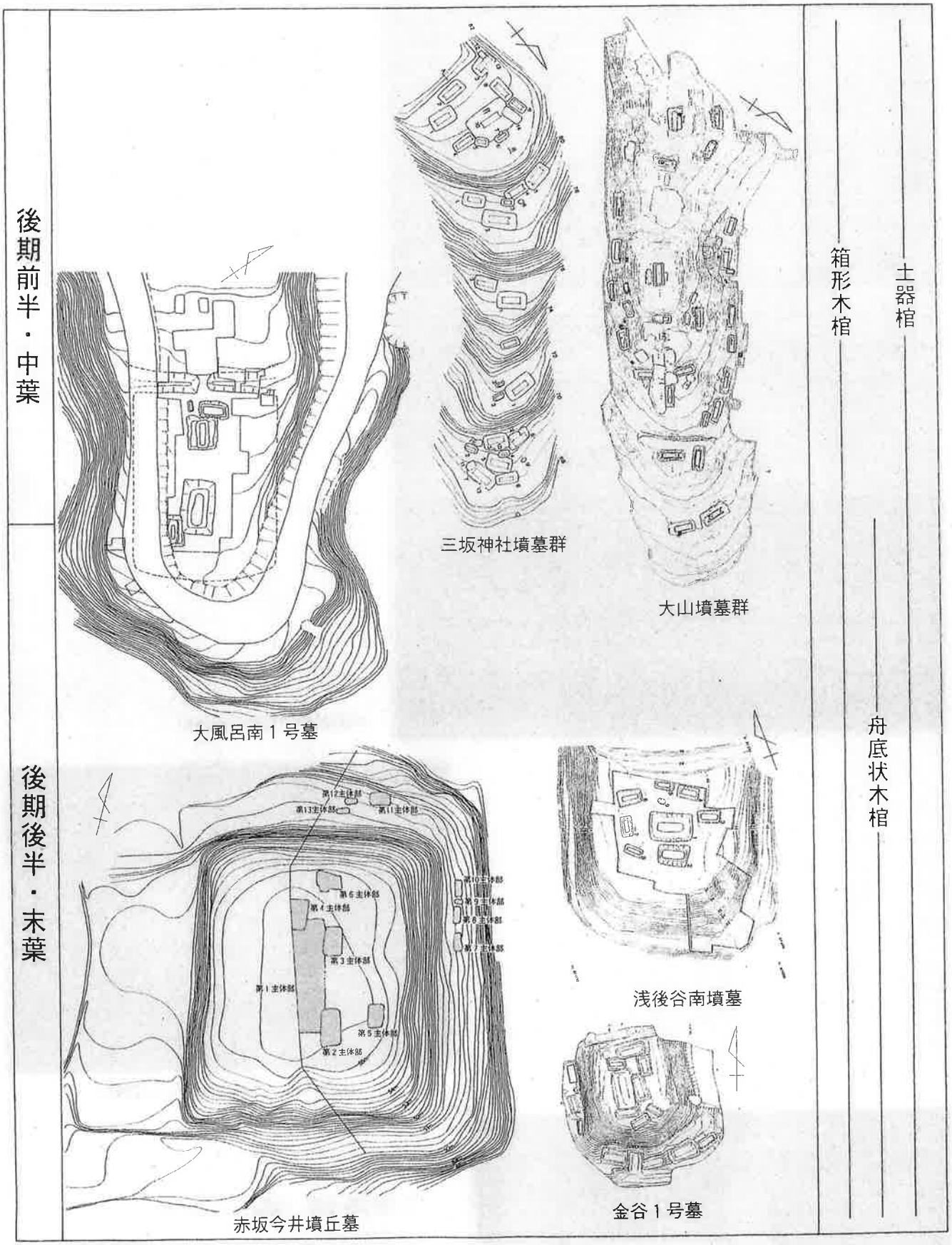


大風呂南１号墓から出土した銅釧

大風呂南１号墓から出土したガラス釧

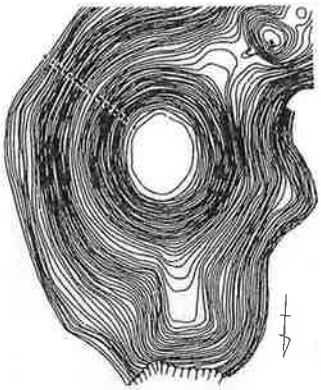
片瀬和雄 編，2000
『丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣

（写真は岩滝町教育委員会提供）

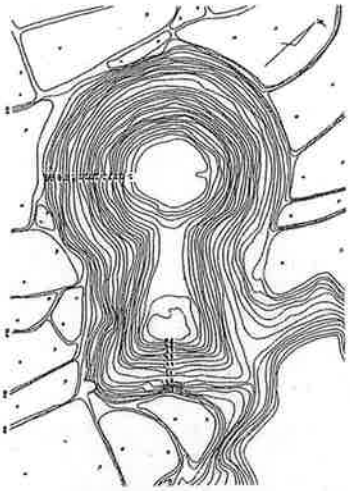


丹後の主要墳墓

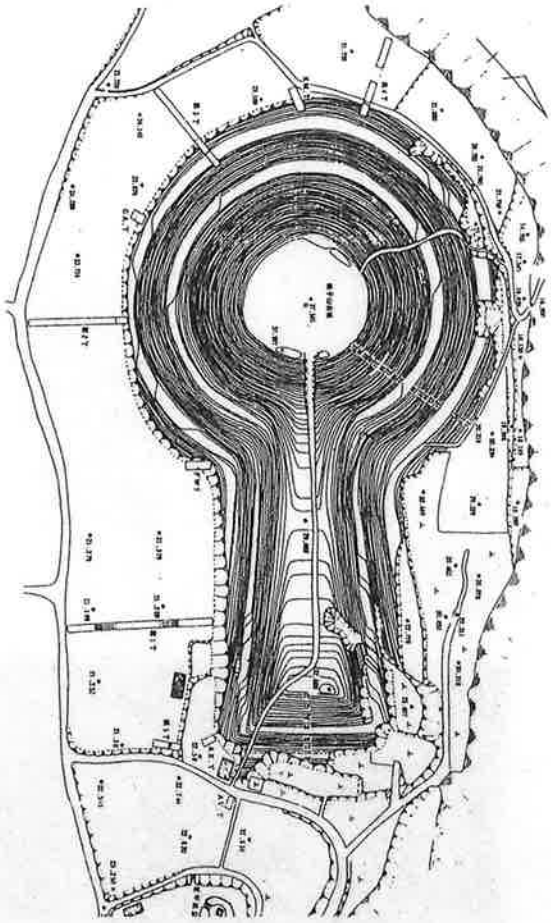
石崎善久，2000「弥生墳墓の構造と変遷－舟底状木棺を中心として－」『季刊考古学』別冊 10



1 涌田山古墳
(『京都の文化財6』
京都府教委1988)

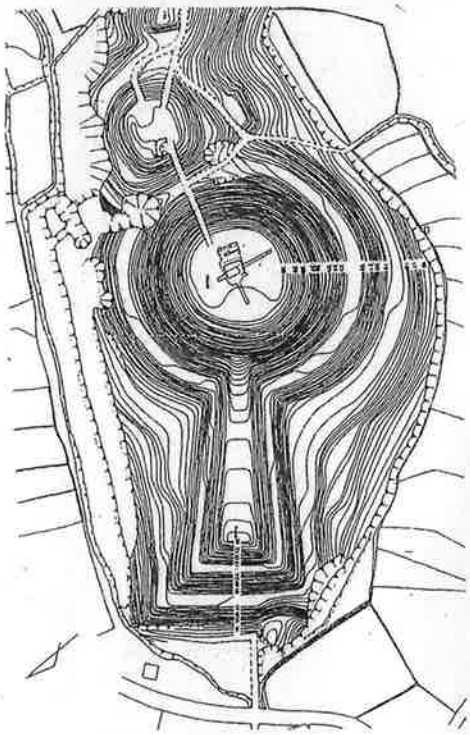


2 黒部銚子山古墳
(『同志社考古9』1972)

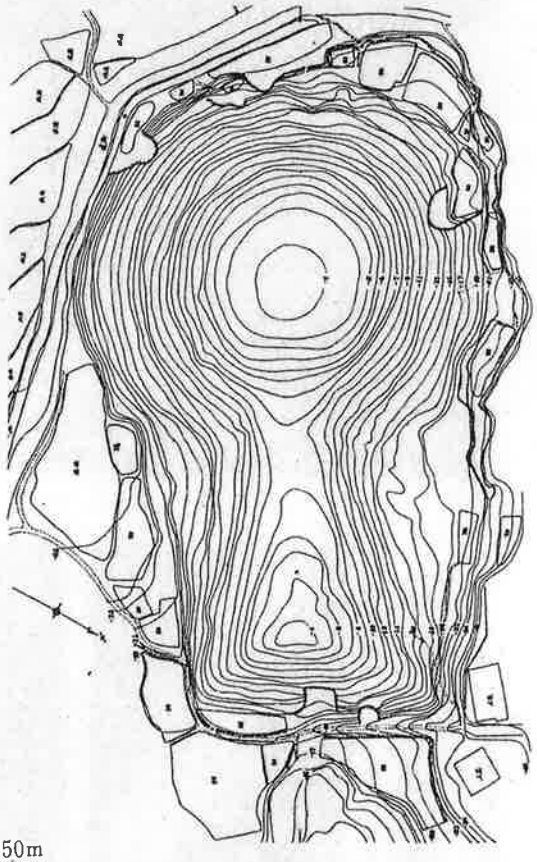


4 網野銚子山古墳
(『網野町文化財調査報告5』1987)

3 白米山古墳(『白米山古墳III』加悦町1999)



5 蛭子山古墳
(『加悦町文化財調査概要4』1985)



0 50m

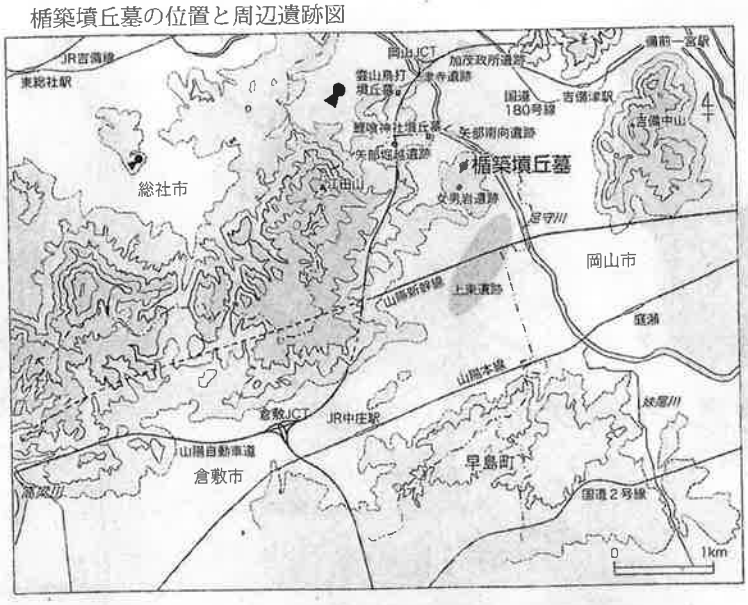
6 神明山古墳
(『同志社考古7』1969)

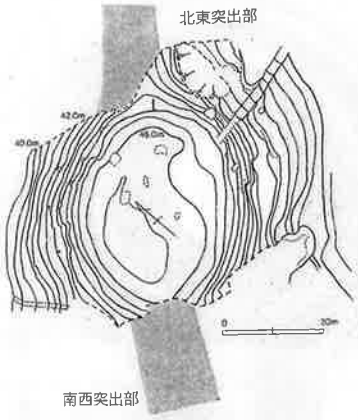
丹後の大・中型前方後円墳

広瀬和雄, 2000「前方後円墳の時代—丹後の巨大古墳—」『季刊考古学』別冊 10

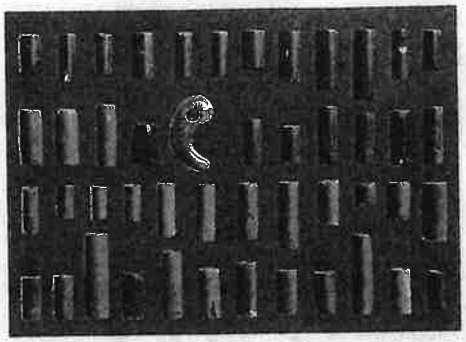
出雲・西谷に眠る王のライバル

吉備の王墓・楯築墳丘墓





楯築墳丘墓測量図
（1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 P11図7を一部改変）



中心埋葬施設から出土した碧玉製管玉、瑪瑙製棗玉（めのうなつめだま）、硬玉製勾玉／弥生後期後葉

楯築墳丘墓の中心埋葬
手前側が頭であり、南東枕になる。水銀朱の広がりが木棺の痕跡を示している。

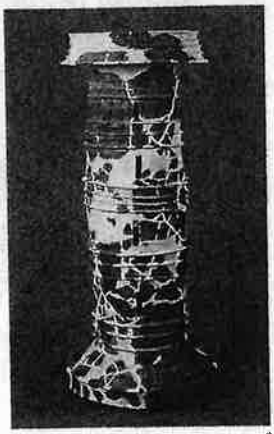
吉備の穴海（あなうみ）を望む王墓

楯築墳丘墓は日本最大の弥生墳丘墓である。形は円形の主墳丘の北東と南西に突出部が付属しており、全長は78・5メートル以上と推定される。墳頂部には5個以上の巨大な立石があるほか、墳丘斜面にも二重に列石が施されていた。また、楯築神社の御神体として祭られている通称「亀石」と称される弧帯石（こたいせき）は他に例のない異形の造形物として知られている。

墳頂部の中心埋葬施設では上縁で長さ9メートル、幅6・2メートル、深さ2・1メートルの墓穴が掘られ、内部には木槨と箱形木棺が納められていた。木棺内には総重量32キログラムの水銀朱をはじめ、各種の玉類、鉄剣が副葬されている。

楯築墳丘墓は規模はもちろん、墓で行う儀礼のルールを完成し、西日本各地の墳墓祭祀に大きな影響を与えた画期的な弥生王墓である。

特殊壺と装飾器台／弥生後期後葉



特殊器台（立坂型）／弥生後期後葉
特殊器台、特殊壺は楯築墳丘墓のものが最古で、かつ完成度も高い。特殊土器を用いた墓前祭祀の手順や方法もこの墳丘墓で完成されたものである。

本頁の写真提供：岡山大学考古学研究室

島根県立古代出雲歴史博物館，2007『弥生王墓誕生－出雲に王が誕生したとき－』企画展図録

朱の中に横たわる王

朱と木槨・木棺痕跡断面

中心主体部
倉敷市楯築墳丘墓
弥生時代後期

中心主体部　木棺内の玉類出土状況　倉敷市楯築墳丘墓　弥生時代後期

朱の中に横たわる王

円礫堆の下に確認された主体部は、木槨で厳重に囲まれた木棺だった。木槨も木棺も、木材は腐朽して残っていない。しかし、発掘調査では、木棺の据えられた場所は誰の目にもはっきりとわかったという。木棺の底には大量の水銀朱が敷き詰められており、鮮やかに棺の輪郭を示していたからだ。

発掘された朱は、三二kgを超える。桁外れに大量の朱は、その中に横たわる王の大きな権勢を示している。

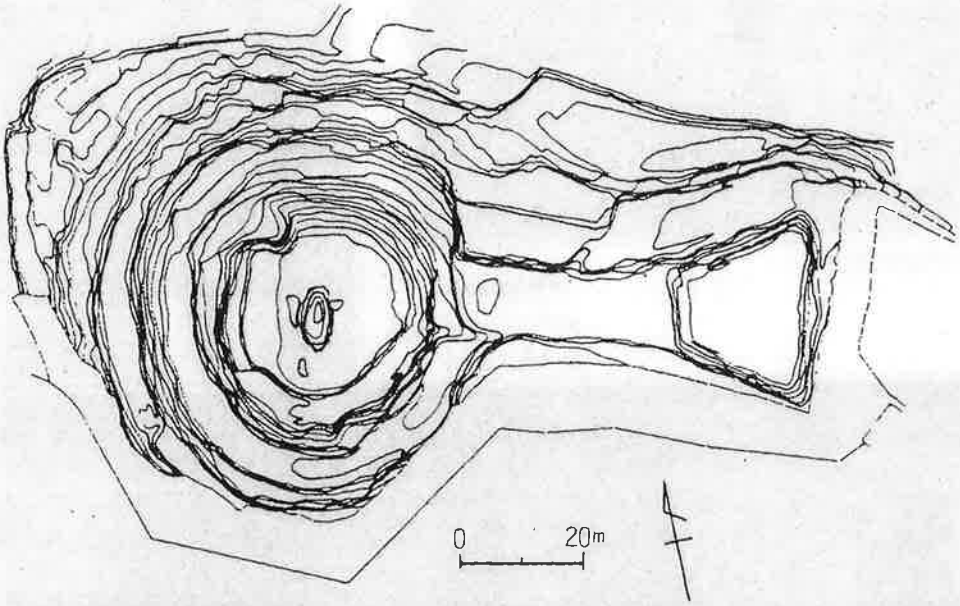
しかし、その王と一緒に眠っていた副葬品は、意外に少ない。鉄剣が一振りあるほかは、玉飾りが三連あるのみだ。

吉備の弥生墓にほとんど副葬品がみられないことを考えると、それでも多いといえるが、後の古墳時代に比べると質素な印象は否めない。大量の水銀朱が、偉大な王の復活を信じて敷き詰められたものならば、王の遺品は来たるべき復活の日まで地上で大切に保管されていたのかもしれない。

謎に包まれた楯築墳丘墓に眠る王は、どのような人物であったのか。その被葬者を『後漢書』東夷伝にみえる「帥升（すいしょう）」とする説がある（松木二〇〇七）。二世紀初めに後漢の安帝に謁見を求めた倭国の王なら楯築墳丘墓の主にふさわしく魅力的な説だが、弥生時代後期後葉（二世紀後半？）とされる年代観との間には、なお丁寧な論証が求められよう。

大阪歴史博物館弥生文化博物館，2013『吉備と邪馬台国―霊威の継承―』秋季特別展

吉備にいち早く築かれた前方後円墳がどのくらいあったかについては、今はなお充分に追究されていないため、対大和勢力との間の政治地図は充分な形で描くことはできない。しかし、特殊器台形埴輪や舶載三角縁神獣鏡の副葬、あるいは石室の構造や墳丘の形状などから、最古型式に属するに違いないと指摘できる古墳はいくつかある。そのうち最大のものは、吉備中山にそびえる中山茶臼山古墳と岡山市東方に横たわる浦間茶臼山古墳である。一方は一際高い山頂に、片方は低い丘陵を占拠している。墳丘全長一〇〇メートル以上の吉備の古墳のうち、最古型式に指摘できるのはこの二基である。

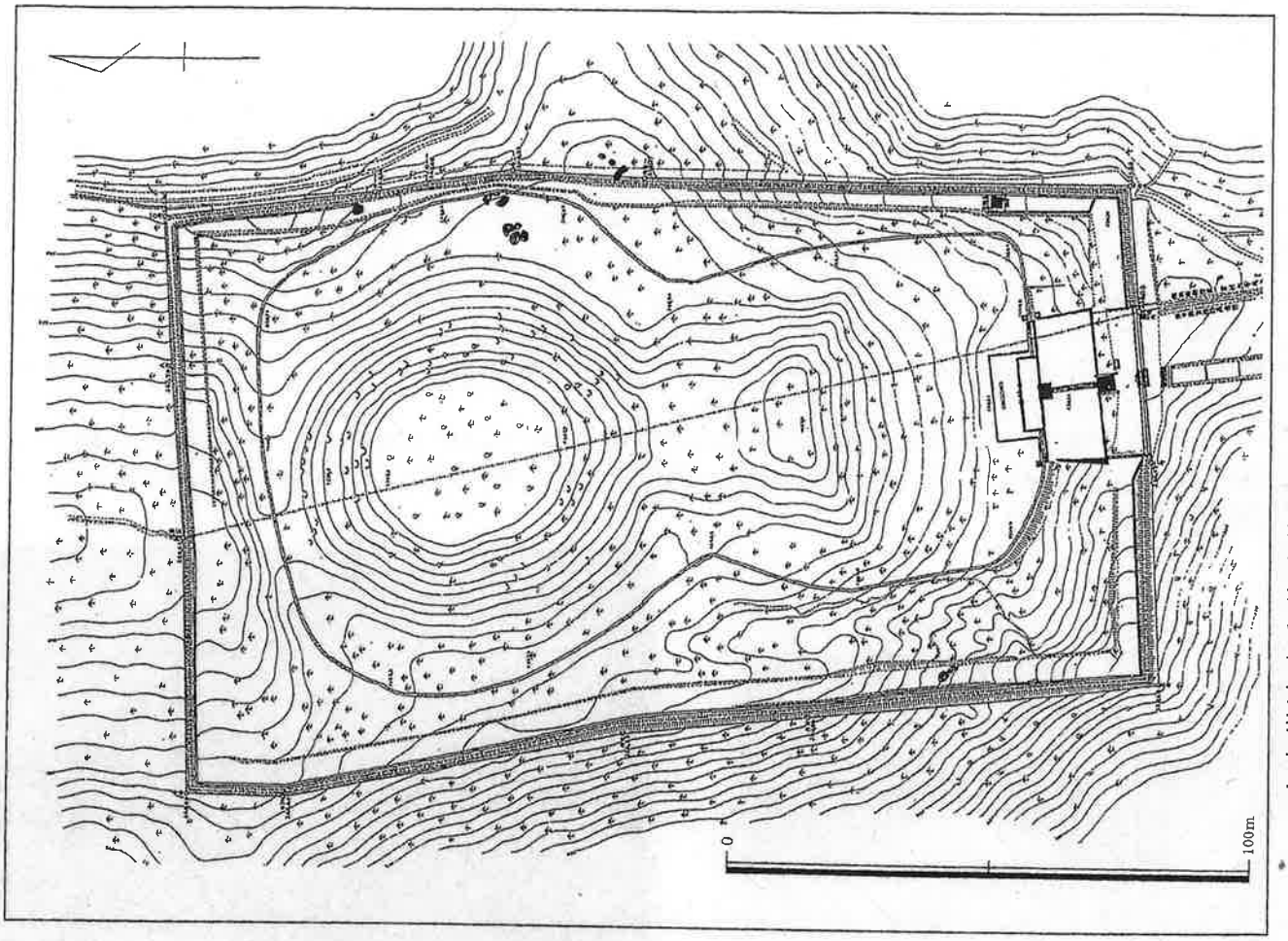


浦間茶臼山古墳　墳丘

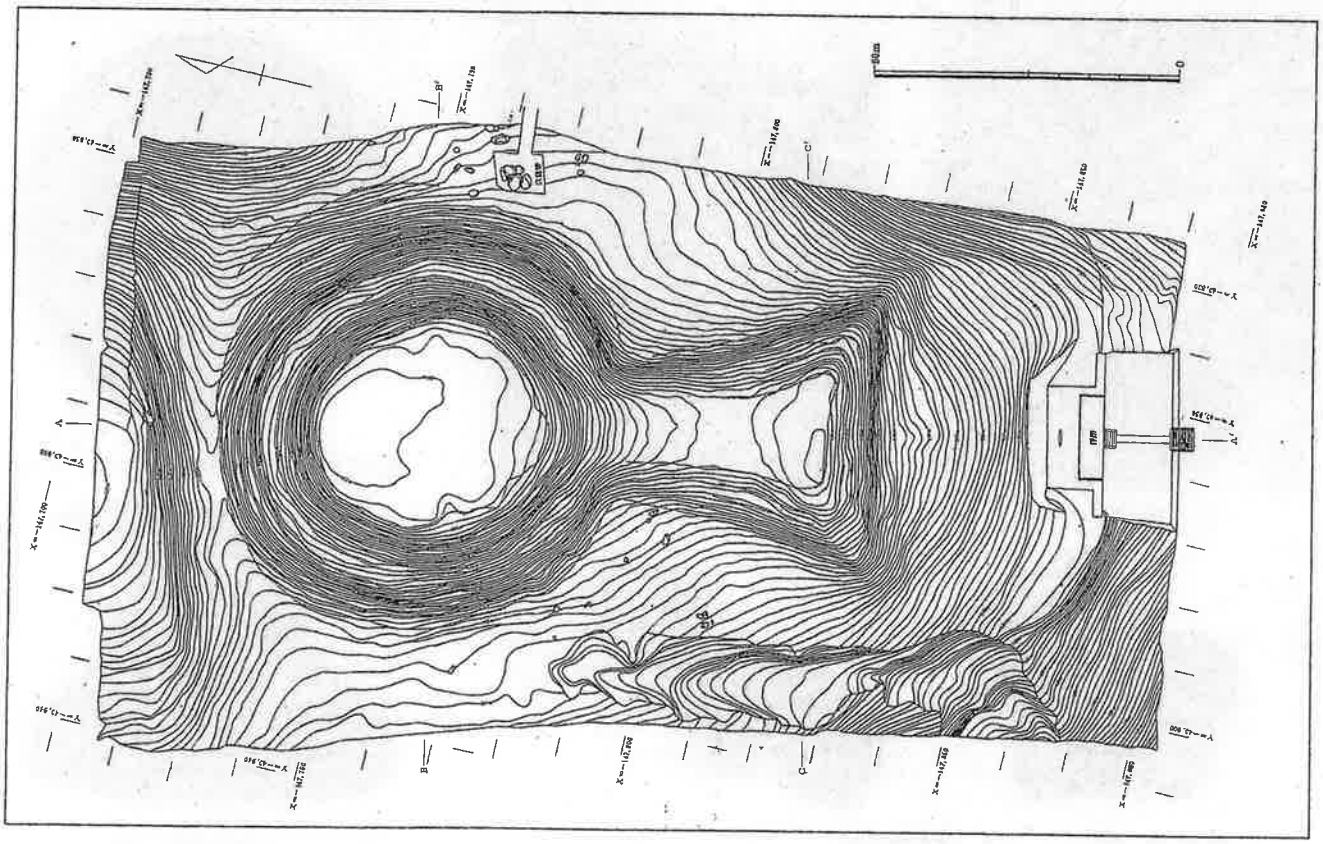
浦間茶臼山古墳　岡山市浦間の低丘陵上に、丘陵を加工盛土して築造された前方後円墳で、前方部が奈良県桜井市箸墓古墳に似て、前端に向かって撥形に開く型式である。また、墳丘から採集された特殊器台形埴輪が都月型であることも、本古墳の古さを物語る。全長一四〇メートル、後円部径約八〇メートル、高さ約一四メートル、前方部前面の幅約六〇メートルをはかる。墳丘は三段築成で、葺石がふかれている。後円部のほぼ中心に大きな穴があり、盗掘があったことを示している。一九七〇年に行なわれた宅地造成によって墳丘の南側の裾部と前方部の下端が破壊された。

一九八八年後円部中央について発掘が行なわれ、内法の長さ約七メートル、幅一・二〜〇・九メートルの竪穴式石室が発見された。石室内は盗掘の痕が歴然としていたが、中国製獣帯鏡片、銅鏃、鉄鏃、鉄剣などが見出された。

近藤義郎，1990『吉備考古点描』河出書房新社



大吉備津彦命墓陵墓地形図（昭和４年測量）



大吉備津彦命墓外形測量図（平成 20 年測量）

陵墓調査室，2009「大吉備津彦命墓の墳丘外形調査報告」『書陵部紀要』第61号〔陵墓篇〕

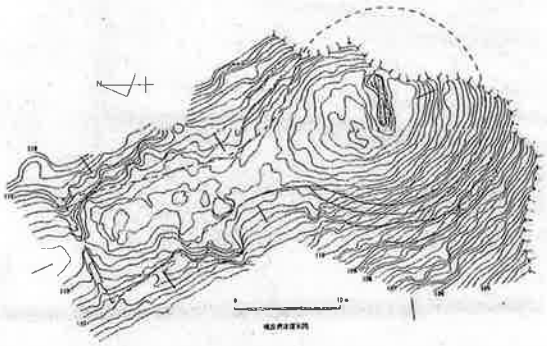
サヌキの王墓

■鶴尾神社４号墳

積石塚で著名な石清尾山古墳群中に所在する全長40mの前方後円墳である。標高112mの尾根上に立地しており、後円部最大径18.7m、高さ４m、前方部幅10.6m、高さ1.2mで、前方部が撥形に開く。墳丘全面が安山岩で覆われる積石塚で、前方部先端には列石が、後円部西側裾には４段の段築が見られる。後円部中央には墳丘主軸と斜行して東西方向に竪穴式石室が築かれている。1982(昭和57)年の高松市教育委員会の調査で、石室は板状の安山岩を小口積みした全長4.7m、幅1.10～1.23m、高さ約1.6mの竪穴式石室で一部に朱が付着した粘土床が確認された。

出土遺物は、綾杉文や複合鋸歯文などを線刻した多数の土器の破片の他、獣帯方格規矩四神鏡１面が出土している。鏡は直径18.2cmで、右回りに20字の銘文がある。この鏡は、発掘調査によって鶴尾神社４号墳石室内から出土した約４分の１の破片と既出の鏡と一致したことから、当古墳出土品であることが確認されたという経緯がある。

出土土器が畿内の３世紀の土器様式である庄内式土器でも古い段階に比定される時期に築かれた最古級の前方後円墳で、前方後円墳を始め、墳丘の葺石と竪穴式石室の出現過程を研究する上でも重要な古墳である。



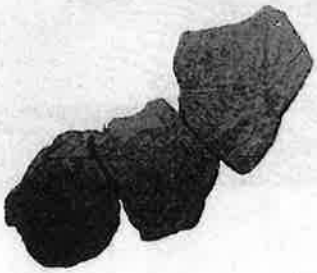
墳丘図

墳丘全景

竪穴式石室全景

竪穴式石室東小口壁

獣帯方格規矩四神鏡　※参考写真



線刻土器

広口壺

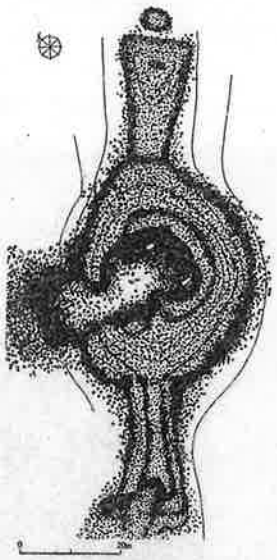
※高松市教育委員会所蔵、墳丘・竪穴式石室の写真フィルムも同市教委所蔵・提供

香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館，2006『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』香芝かみ邪馬台国シンポジウム 6，資料集

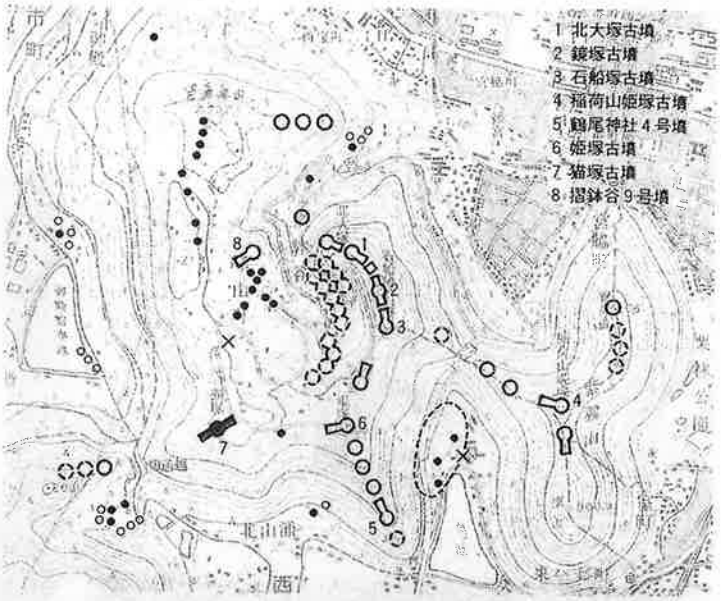
■猫塚古墳

高松市南西部の標高約200mの石清尾山に位置する。石清尾山には石清尾山古墳群と呼ばれる100基をこえる古墳があり、前方後円墳や双方中円墳、方墳、円墳など古墳時代前期の４・５世紀にかけて造られた約30基の墳丘を石で造った積石塚が分布している。

猫塚古墳は、全国的にも稀な形状の積石塚の双方中円墳で、全長約96m、高さ約５mを測り、古墳群の中でも最大の規模を誇る。同形式の鏡塚古墳とともに古墳群の中でも古い古墳のひとつである。中円部は、突出部に比べて、高くなっており、中央に大きな竪穴式石室１基とそれを取り囲む８基の小さな石室があったと伝えられている。石室内の副葬品の出土状態などについては不明であるが、1910（明治43）年に、中央の石室から内行花文鏡２点、六獣鏡１点、四獣鏡１点、仿製三角縁三神三獣獣帯鏡１点、石釧１点、小銅剣17点、銅鏃８点、鉄鏃３点、鉄斧１点、鉄剣４点、鉄刀１点、筒形銅器３点、土師器壷１点等の多くの副葬品が発見されている。



墳丘図



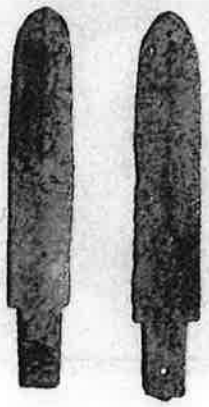
石清尾山古墳群の古墳分布

石釧

内行花文清白鏡

四獣鏡

筒形銅器



銅剣

広口壷

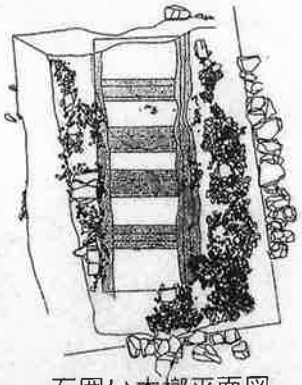
※高松市教育委員会所蔵（現品は東京国立博物館所蔵）

アワの王墓

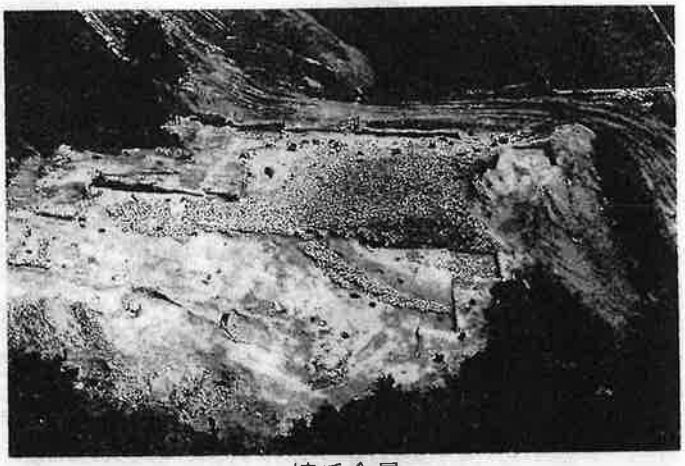
■萩原１号墓

直径18mの円丘部に長さ8.5m、幅3.6mの低平な長方形状の突出部(前方部)を持つ全長26.5mの前方後円形の積石塚である。円丘部に沿って周囲に幅1.8mの溝があり、幅3.6mのくびれ部両側には壷棺を納めた竪穴式石室が作られている。主体部は、円丘の中央に石で囲った木槨内に棺を安置する「石囲い木槨」と呼ばれる特殊な構造を持つ埋葬施設で、残存長４m、幅1.25mを測る。木槨の上面は、長方形の壇状に築かれた白色の円礫で覆われていたものと推定され、供献されたと考えられる壷・台付壷・高杯等の小型の精製土器が出土している。

副葬品は、画文帯神獣鏡(画文帯同向式神獣鏡)１面と管玉３点等がある。鏡は直径16.1cmで、副葬時に意図的に割られて納められたものと推定され、同型鏡が公孫氏の支配地域である朝鮮半島(平壌大同江付近)から出土している。近年、奈良県桜井市のホケノ山古墳や兵庫県たつの市綾部山39号墓でも同様の石囲いの埋葬施設が発見され、同種の画文帯神獣鏡が副葬されていたことから、３世紀の東部瀬戸内地域と畿内との関係を研究する上であらためて注目されるようになってきている。萩原１号墳は、３世紀前半の築造と考えられ、古墳の発生を考える上でも貴重な墳墓である。

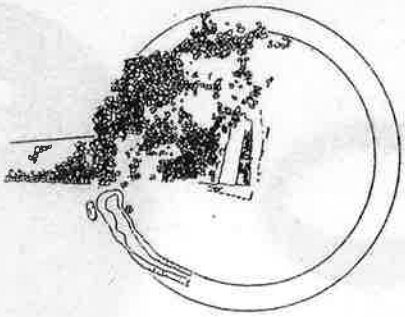


石囲い木槨平面図



墳丘全景

石囲い木槨



墳丘図

管玉

鉇

画文帯同向式神獣鏡

供献土器

※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

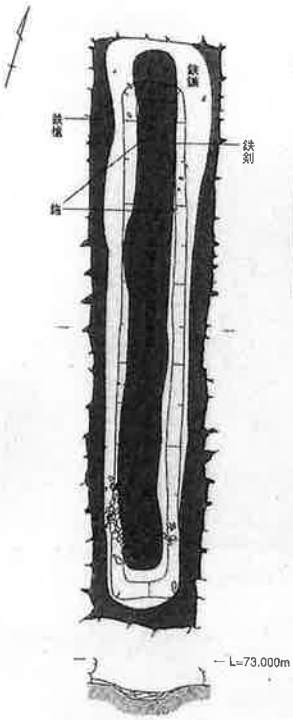
香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館，2006『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム６，資料集

■西山谷２号墳

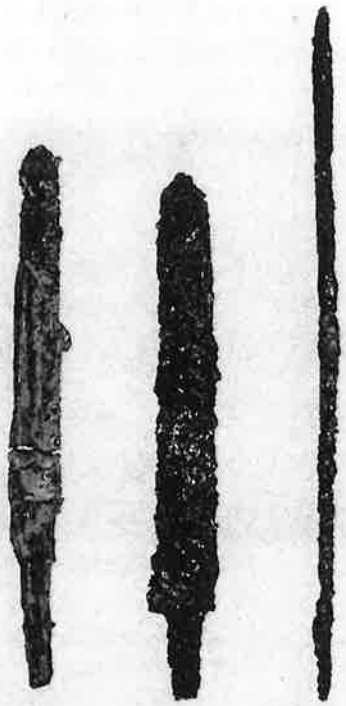
萩原１号墓の近隣地に所在する尾根を削り出して整形した墳丘の長径20m、短径18m、高さ約２mの不整形の円墳である。墳丘の中央部に長さ4.72m、幅北端で1.05m、南端で0.83mの南北方向を主軸とする長大な竪穴式石室がある。竪穴式石室は、南北6.5m、東西4.8mの墓壙全体が結晶片岩と呼ばれるアワ特有の青い石で覆うように造られている。石室内には粘土床があり、その上に朱を敷き詰めたU字形の刳抜式木棺を安置していたものと推定されている。

斜縁上方作銘獣帯鏡と呼ばれる中国製の青銅鏡１面をはじめ、鉄剣、鉄槍、鉄鏃、土器などが出土している。鏡は面径12.5cm、重量約157.6ｇで、右回りに「上方乍竟大工青龍白虎子」の銘文と神仙像と５体の獣形のレリーフがある。鏡は一部を欠損するが、当時は完全品として副葬されたものとみられる。同種の鏡は数例出土しているが、そのうち、広島県広島市中子田１号古墳出土鏡が最も類似している。出土した土器から３世紀中葉の築造と考えられ、徳島県内を始め、畿内でも最古段階の竪穴式石室を持つ古墳として、竪穴式石室の出現過程を考える上でも重要な古墳である。

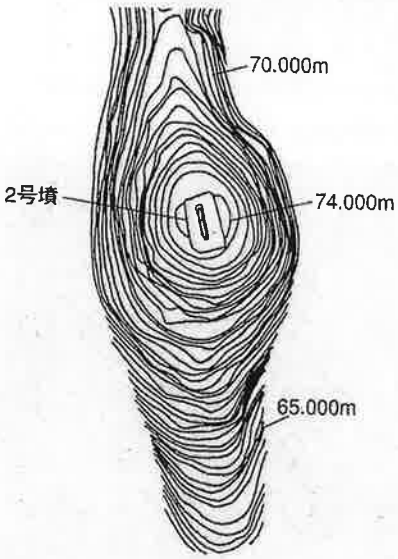
竪穴式石室



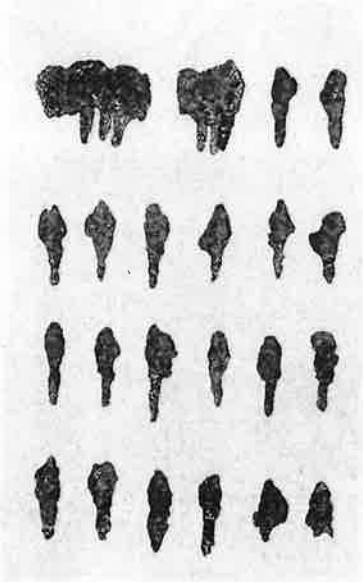
遺物出土状況図



鉄剣　鉄槍　鉇



墳丘図



鉄鏃

斜縁上方作銘獣帯鏡
※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

摂津の墳墓

■深江北町遺跡の墳墓群

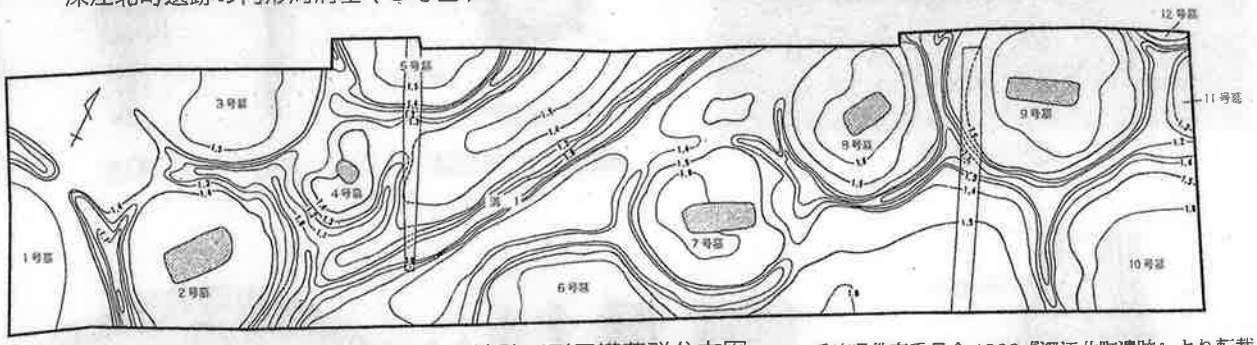
深江北町遺跡は、神戸市東部、六甲山南麓の芦屋川西方に広がる弥生時代中期から平安時代初期にかけて形成された複合遺跡である。遺跡の北方には弥生時代後期の高地性集落として著名な会下山遺跡を始め、西方には東求女塚古墳や処女塚古墳、西求女塚古墳などの古墳時代前期の古墳が分布している。

1986（昭和61）年の兵庫県教育委員会の調査で、庄内式併行期の11基からなる円形周溝墓群が検出されている。墳丘の規模は、直径7～10ｍ、周溝の幅0.7～2ｍ、深さ30～40㎝前後で円形を指向している。半数の円形周溝墓は陸橋部を持ち、隣接する周溝墓と周溝を共有しながら調査区中央部の幅1.6～2ｍの溝を介して東西2群に分かれて分布している。埋葬施設は、墳丘墓ごとに1基の単葬で、主体部の主軸と直交する方向に陸橋部が位置するものが多い。周溝内からは二重口縁壺等の供献土器が出土しており、一部に焼成後に穿孔された壺もみられる。

このような円形周溝墓は、六甲山南麓の深江北町遺跡や三田盆地の三田市川除・藤ノ木遺跡、猪名川流域の伊丹市口酒井遺跡、豊中市豊島北遺跡、淀川流域の茨木市郡遺跡など摂津地域に偏在して分布する傾向があり、弥生時代から古墳時代への過渡期の墓制の変遷を研究する上でも貴重な遺跡である。

深江北町遺跡の円形周溝墓（８号墓）

深江北町遺跡円形周溝墓群出土土器



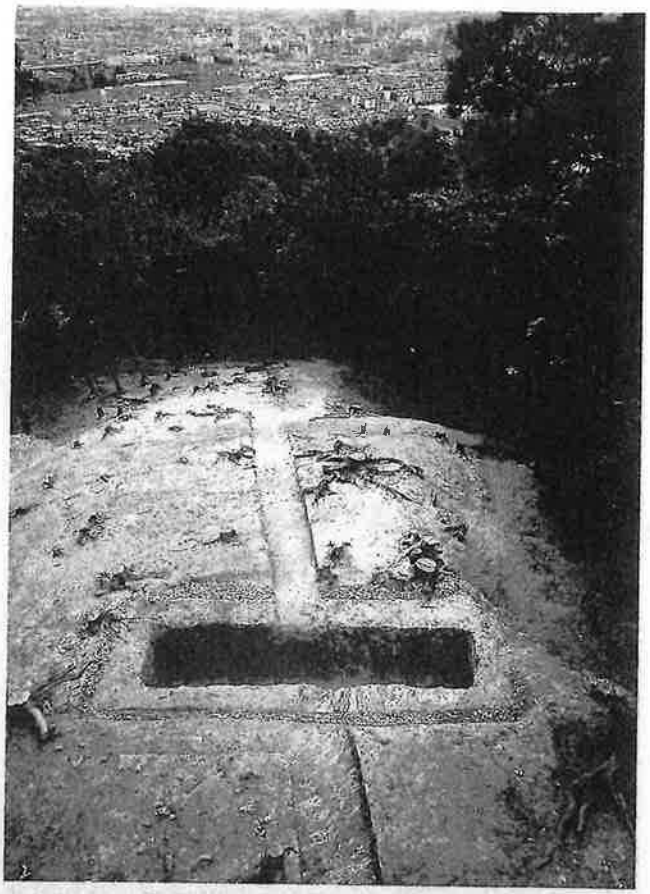
深江北町遺跡円形周溝墓群分布図　　兵庫県教育委員会 1988『深江北町遺跡』より転載

深江北町遺跡円形周溝墓群全景

※兵庫県立考古博物館所蔵写真（『ひょうごの遺跡 11号』1986より転載）

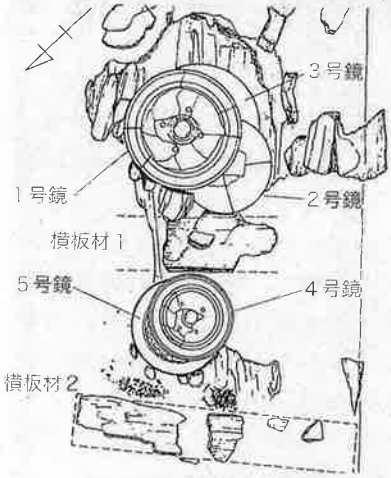
香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館、2008『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム8，資料集

安満宮山古墳上空から淀川を望む



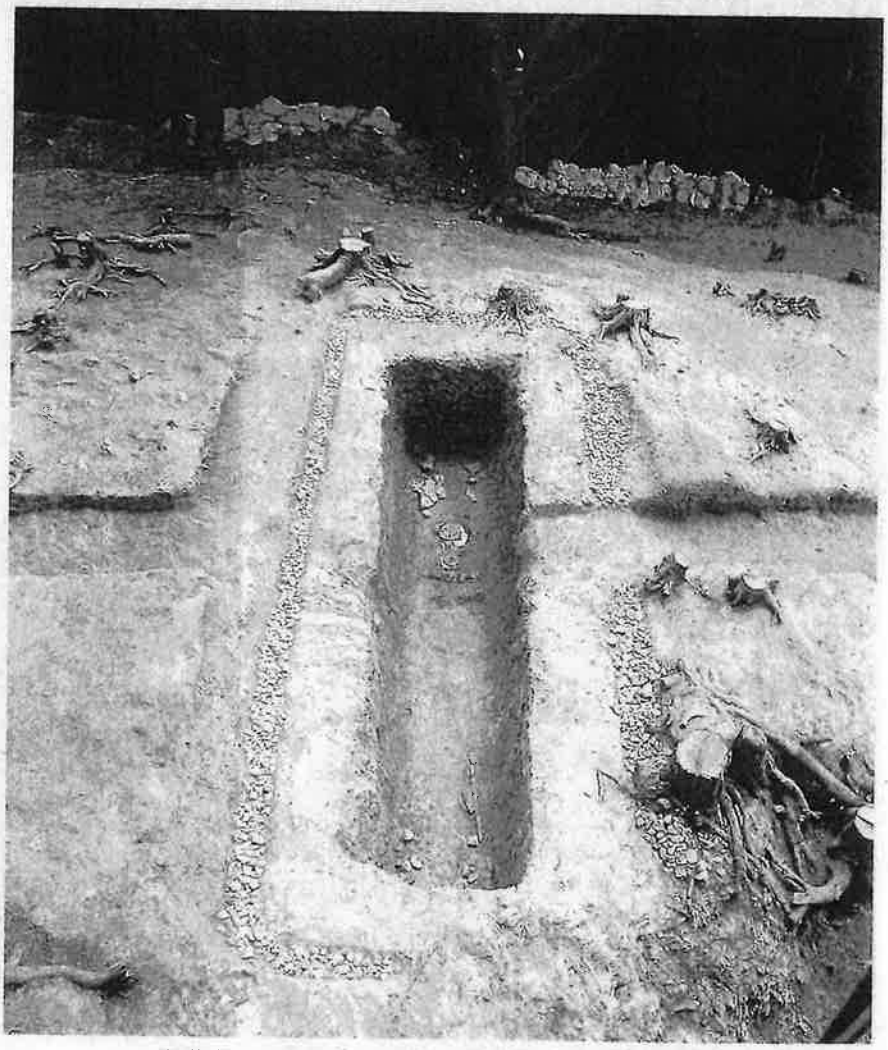
安満宮山古墳全景（北東側から）

鏡群とガラス小玉群の出土状況



木棺内鏡群出土状況図
高槻市教育委員会2000『安満宮山古墳』より転載

木棺埋納坑東側の鏡等出土状況



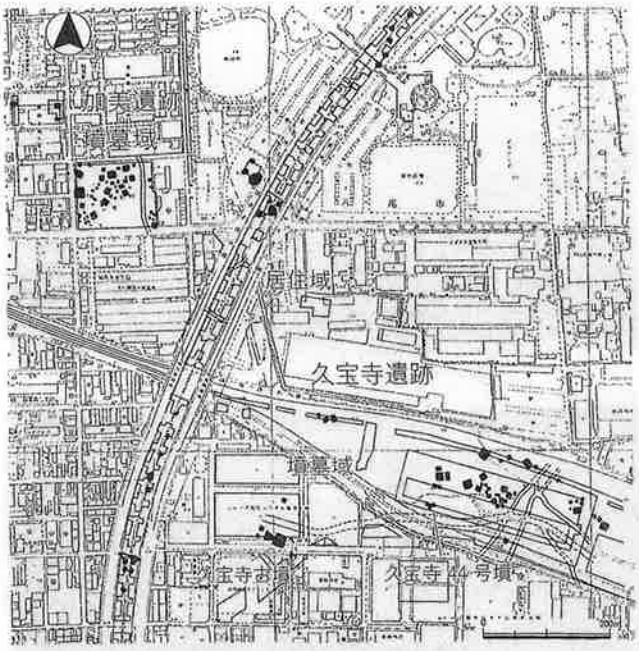
安満宮山古墳墓坑及び木棺埋納坑全景（西側から）

※高槻市教育委員会写真提供

■久宝寺遺跡の墳墓群

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市の北西部及び大阪市、東大阪市の一部に及ぶ東西約 1.6km、南北約 1.7km にわたって広がる縄文時代後期から近世にかけての複合遺跡である。遺跡は、大阪平野の南部、旧大和川の支流の長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に立地している。

当遺跡では、既往の調査で多くの成果が蓄積されているが、特に遺跡の中心時期にあたる古墳出現前後の弥生時代後期後半から古墳時代前期には、周溝墓等の墳墓を始め、竪穴式住居等の集落や水田等の生産関係遺構が各所で検出されており、東海・吉備等の他地域からの搬入土器や朝鮮半島南部由来の炉形土器・軟質両耳甕等から、内外とも活発な交流があったことを示している。中でも 1983（昭和 58）年の調査で出土した国内最古の庄内式期新相の準構造船は、旧河内湖南岸に位置する久宝寺遺跡が港津的な役割を果たした集落であった可能性を示す資料として注目されている。



久宝寺・加美墳墓群分布状況
財団法人大阪府文化財センター 2003
『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』を加筆・転載

久宝寺遺跡竜華地区で行われた 2001（平成 13）年から 2004（平成 16）年の調査では、古墳時代初頭の庄内式期古相から布留式期古相にかけて築造された 60 基以上の方形周溝墓が検出されるなど、遺跡内では、これまで弥生時代後期から古墳時代中期の方形周溝墓や方墳、前方後方墳など概ね 80 基の墳墓が検出されている。北西に隣接する大阪市加美遺跡でも方形周溝墓 46 基を含む同時期の墳墓群が検出されており、両遺跡の関係は不明であるが、墓域は、生活圏や生産域を交えながらも数百m四方の範囲で広がっているものと推定されている。

墳墓は、概ね、一辺数 m 前後の方形の墳墓を主流として、最小で一辺 2 m から最大で 10 数 m の規模を持つものがみられる。中には弥生時代後期の久宝寺南 1 号墳や布留式期古相の久宝寺古墳、庄内式期新相の久宝寺 44 号墳などのように墳墓群の中でも他と卓越した規模を持つ 3 基の前方後方形の墳墓が分布していることが注目される。棺材は組合式木棺が多用されるが、一部に布留式古段階の久宝寺 1 号墳のように、墓坑内に割竹形木棺を直葬する例もみられる。また、墳丘祭祀に関わる資料として、久宝寺 1 号墳では墳丘の四隅に外面は朱が施され、底部は焼成後に穿孔された 4 個体の直口壺が配置されている。久宝寺・加美墳墓群や周辺地域では布留式期の墳墓の墳丘や周溝内から底部穿孔壺が出土することが知られており、当該期の河内平野では共通した葬送儀礼や墳墓祭祀が行われていた可能性を示している。埋葬施設が完存するものが少ないが、副葬品は管玉等が出土する以外は全体的に見て皆無もしくは貧弱で、内行花文鏡片等を持つ加美遺跡の墳墓群とは少し質的な差異がみられる。久宝寺遺跡の墳墓群は、河内平野における前方後方墳や古墳の出現過程を考える上でも貴重な資料である。

久宝寺遺跡の墳墓群中の前方後方墳（久宝寺 44 号墳）

久宝寺遺跡の方形周溝墓群
※財団法人大阪府文化財センター写真提供

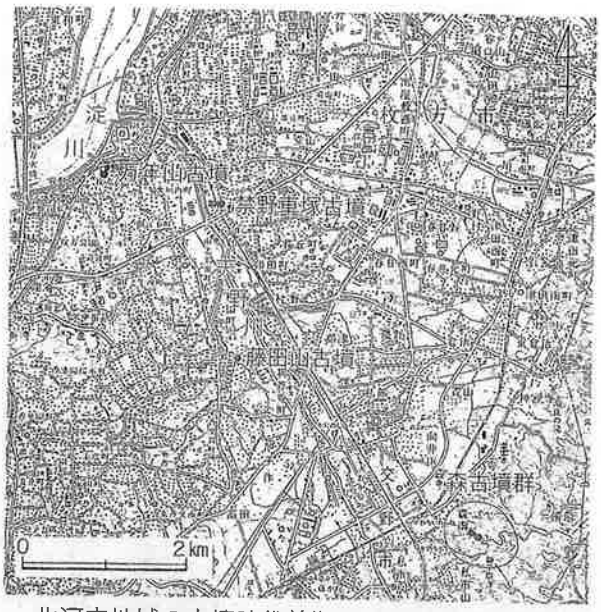
香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館，2008『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』
ふたかみ邪馬台国シンポジウム 8，資料集

河内の鏡

■藤田山古墳

淀川の一支流である天野川沿いには、全長110ｍを越える前方後円墳の禁野車塚古墳や古相の三角縁神獣鏡８面が出土した万年山古墳、全容は不明であるが、交野市域の山中に築かれた森古墳群等の古墳時代前期の古墳が集中している。藤田山古墳もその一つで、枚方市の天野川西方の標高39ｍの丘陵に築かれた古墳時代前期中頃の直径25ｍの円墳と推定されている（全長50ｍの前方後円墳とする説もある）。

1956（昭和31）年に画文帯環状乳神獣鏡の採集を契機として行われた緊急の発掘調査で、後円部の中心に東西方向に並ぶ３基の粘土槨が検出され、中央槨からは鉄斧や鉇各１点、銅鏃５点、碧玉製鏃形石製品２点等が出土している。



北河内地域の古墳時代前期のおもな古墳の分布

藤田山古墳と図像文様が類似する画文帯環状乳神獣鏡は、他にも鳥取県西伯郡宇田川村（現在の米子市）の６世紀代の中西尾古墳から１点出土している。福永伸哉氏の研究によると、「顔氏作」で始まる銘文を持つ鏡は、鏡種は異なるものの安満宮山古墳や大田南５号墳から出土した２面の青龍三年方格規矩四神鏡を含め、国内で僅か数例であり、藤田山古墳出土鏡は、魏代になって作られた数少ない特殊な神獣鏡と考えられている。

直径13.1㎝

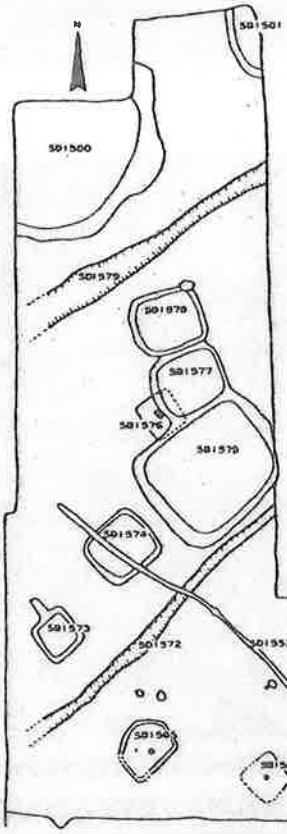
顔氏作画文帯環状乳神獣鏡

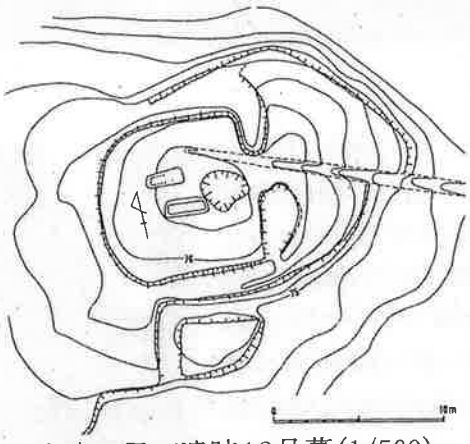
※枚方市教育委員会写真提供

■銘文

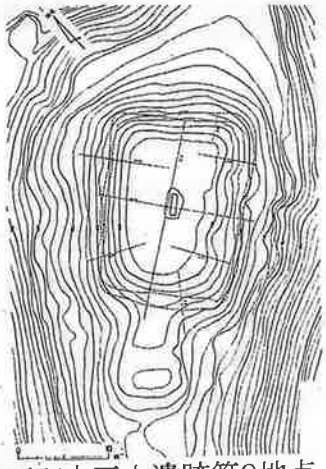
顔氏作自有巳東王父西王母

※銘文は枚方市史編纂委員会1976『枚方市史』第一巻による。

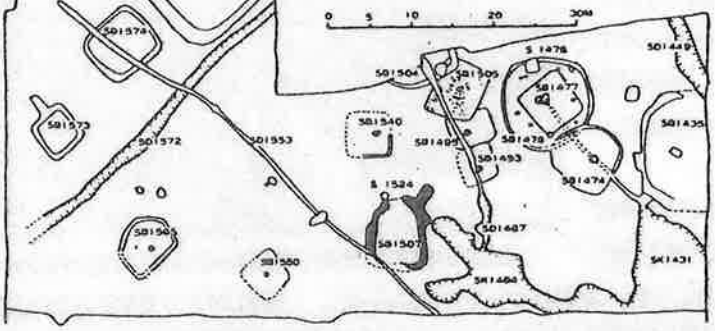




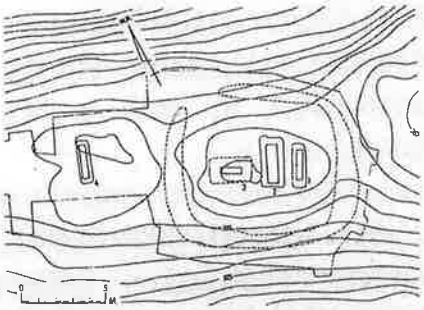
広陵町黒石遺跡10号墓(1/500)



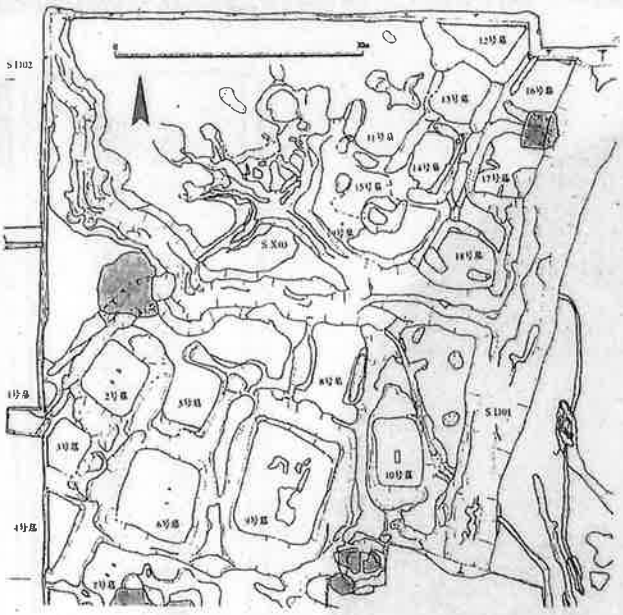
榛原町大王山遺跡第9地点



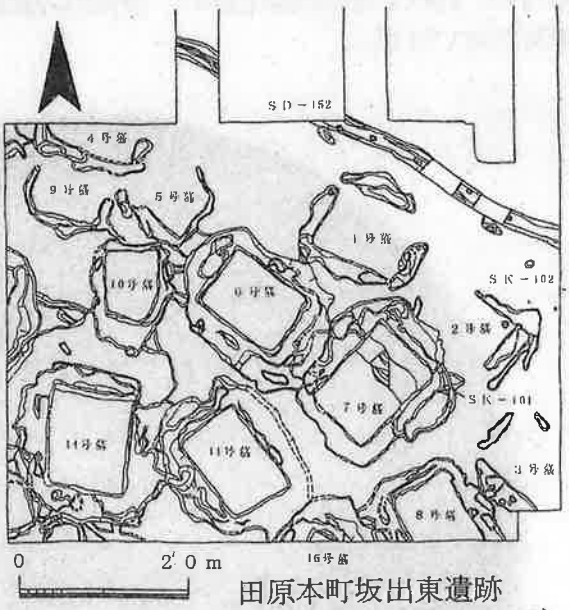
奈良市佐紀遺跡



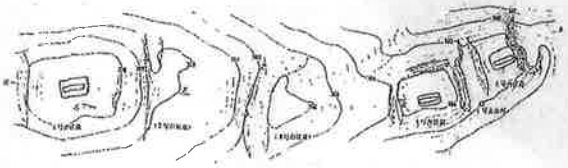
榛原町キトラ遺跡(1/500)



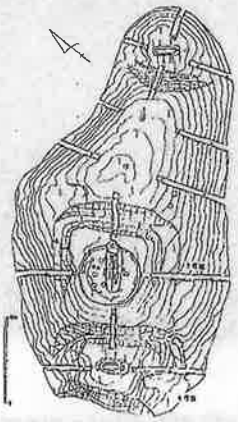
奈良市柏木町遺跡



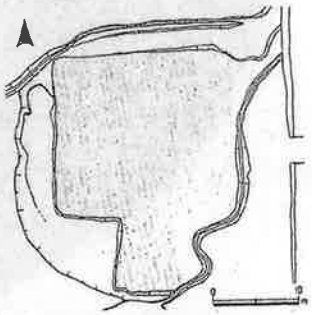
田原本町坂出東遺跡
(「現説資料」2001による)



榛原町野山遺跡丸尾支群台状墓



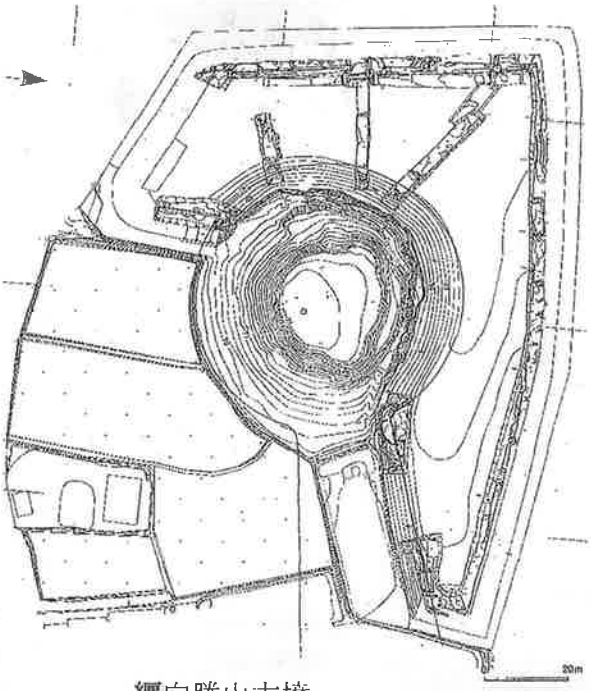
大宇陀町平尾東6・7号墓



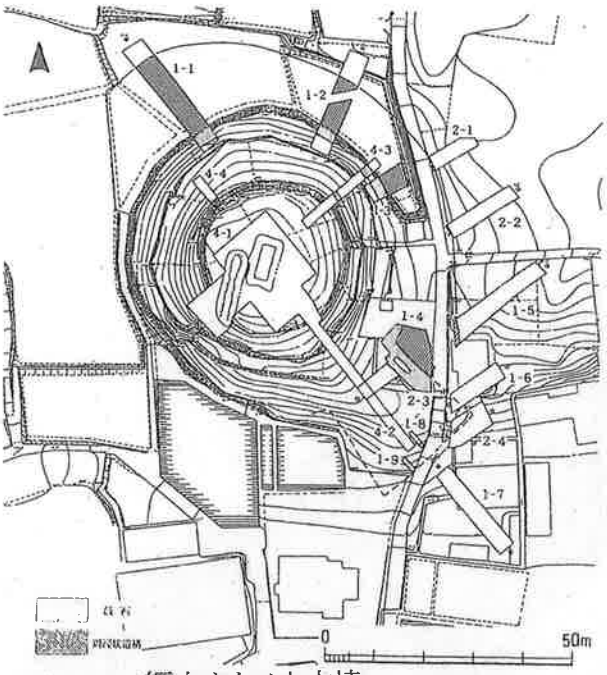
纒向メクリ1号墳(桜井市
「特別展資料」1995による)

大和の方形墓

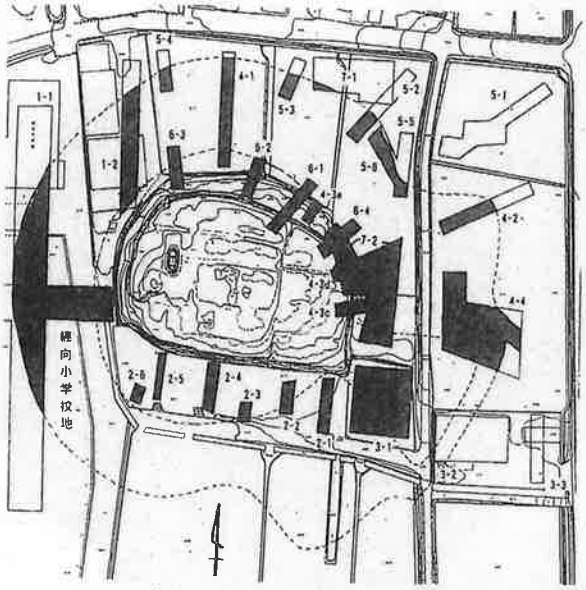
寺沢 薫, 2002「纒向型前方後円墳の誕生」シンポジウム『邪馬台国時代の吉備と大和』資料集



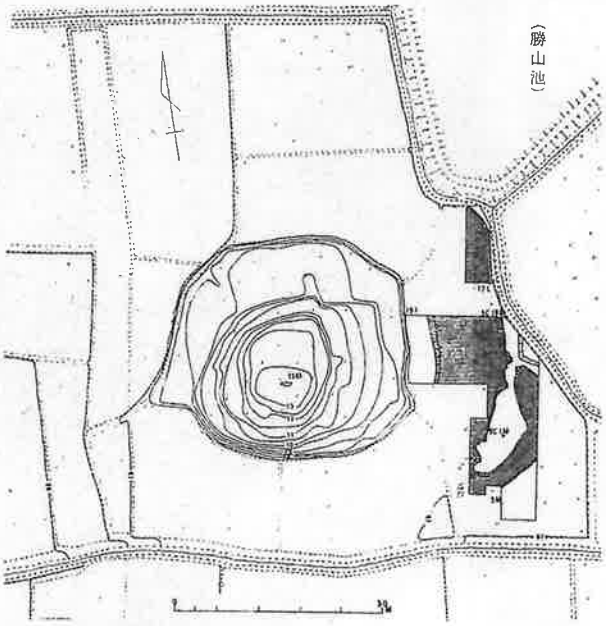
纒向勝山古墳



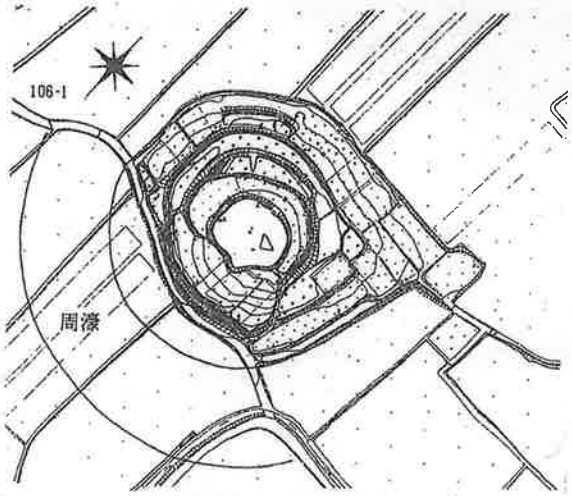
纒向ホケノ山古墳



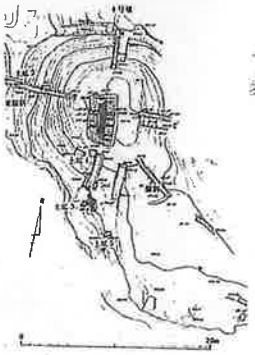
纒向石塚古墳



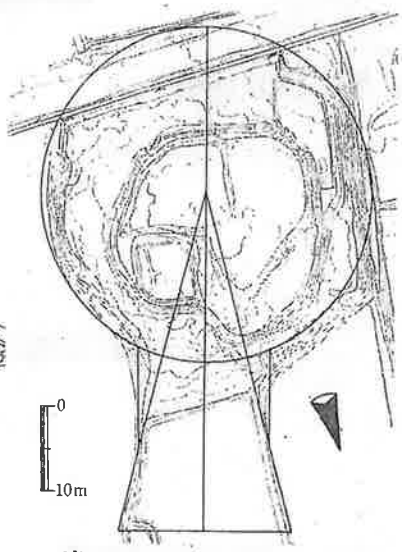
纒向矢塚古墳



纒向東田大塚古墳

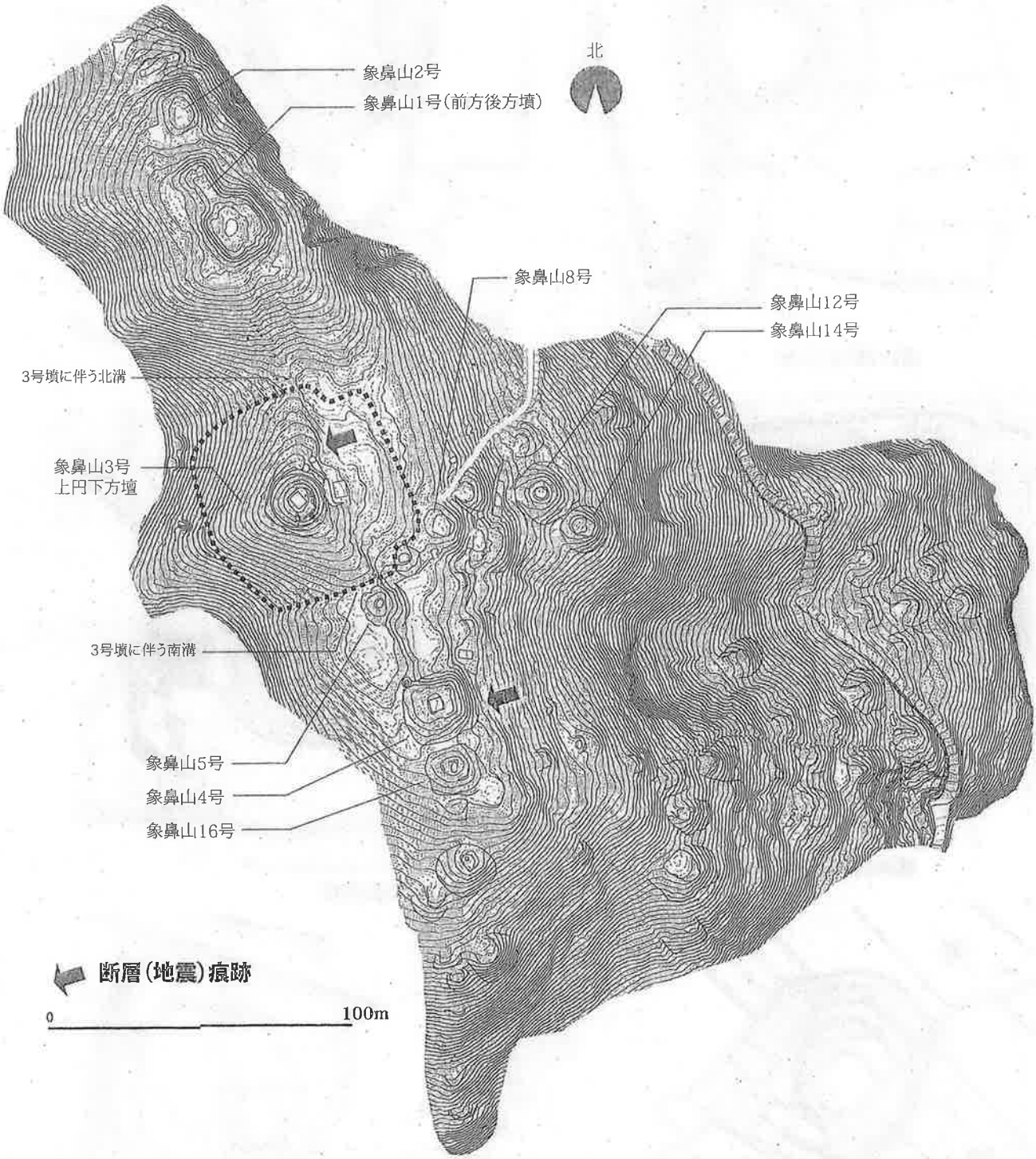


菟田野町見田大沢
4号墳(1/1000)



巻の内石塚古墳(1/1000)

大和の纒向型前方後円墳

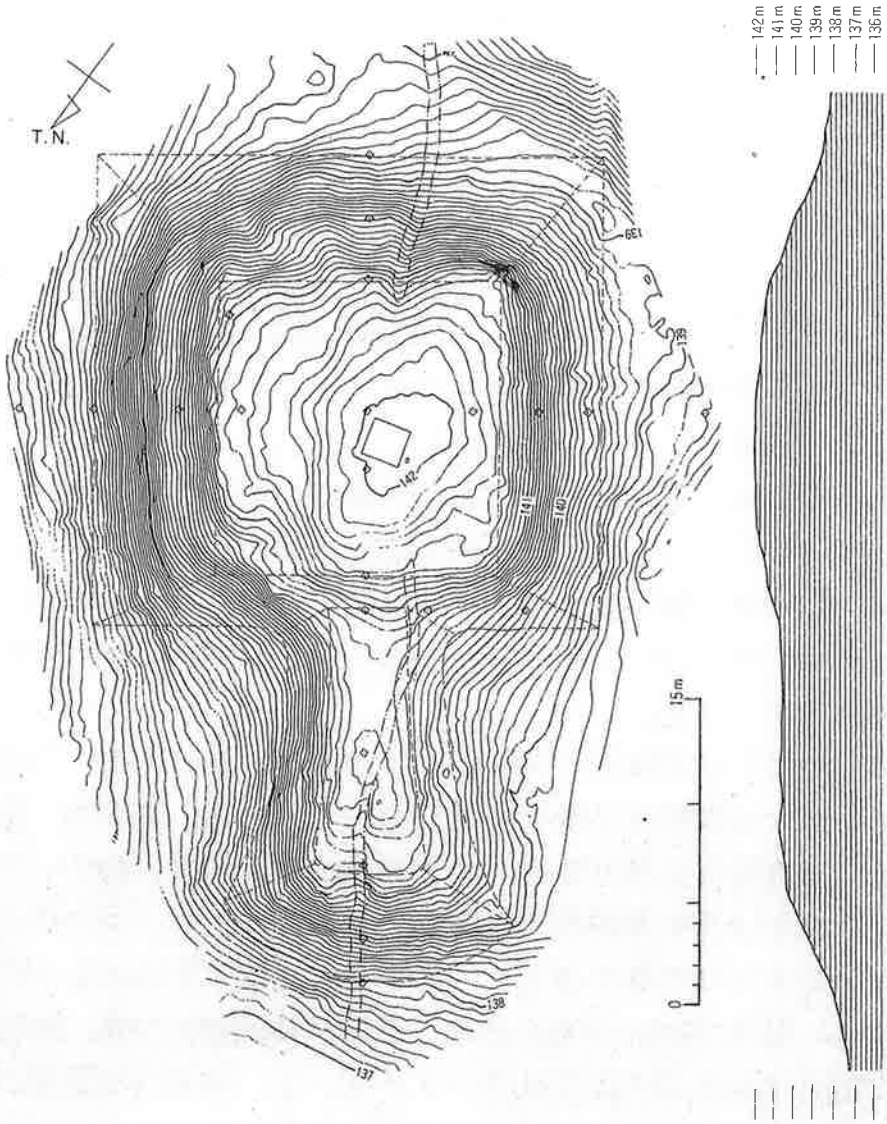


象鼻山古墳群（岐阜県養老町）２世紀前半期を中心とする墳丘墓

象鼻山1号墳

古墳時代前期前葉

岐阜県養老郡養老町



象鼻山一号墳の墳丘復元図

『養老町埋蔵文化財調査報告』第2冊

岐阜県南西部の濃尾平野を見下ろす関ヶ原の東に位置する独立丘陵上に築かれた古墳です。丘陵上には七世紀初頭にかけて約七〇基の墳丘墓や古墳が営まれています。

一号墳は標高一四二㍍に営まれた古墳群唯一の前方後方墳で、全長約四〇㍍、後方部長約二三・八㍍、同幅約二六・五㍍、前方部長約一六・二㍍、同幅約一七㍍を測ります。埋葬施設は、後方部ほぼ中央にあり、墳丘主軸とは一致しませんが、南北に近い方向と考えられます。墓壙の規模は、長軸五・七㍍、短軸二・二㍍、深さ三五㌢で、墓壙内に箱形木棺が直葬されていたと考えられています。墓壙内からは、双鳳文鏡（夔鳳鏡）の破砕鏡一面、琴柱形石製品三点、鉄刀二点、鉄剣六点、鉄鏃五三点、朱が入った壺一点が出土しています。このうち、鏡と琴柱形石製品は頭位側、朱が入った壺は足元側でみつかっています。また、後方部の墳丘盛土内からは、二重口縁壺、小形器台、高坏、S字状口縁台付甕がみつかっています。これらの出土遺物から、三世紀後半頃の築造と考えられます。

なお、近年までの調査で、この一号墳に先立つ墳墓の存在が明らかになっています。最古級の墳墓が、直径一八㍍の円形を呈する八号墳で、二世紀後半頃の築造と考えられています。また、八号墳西側の尾根頂部に位置する三号墳は、南北幅七〇㍍の方形壇の中心に直径一七㍍の円丘を配置した上円下方壇と称され、八号墳を遡る時期に築造された特殊な性格を持つ遺構との説があり、墳墓以外の可能性も示唆されています。そして、この三号墳の築造を契機として、群形成が始まったとの考えがあります。

大阪府立近つ飛鳥博物館，2017『東国尾張とヤマト王権 ― 考古学からみた狗奴国と尾張連氏 ―』平成29年度春季特別展

群馬県の古墳時代

群馬県では、昭和10年に県下全域を対象とする古墳の悉皆調査が一斉になされ、その調査成果は『上毛古墳綜覧―群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第５輯―』として刊行された。それによれば、当時、群馬県には8,423基の古墳が存在していたことが知られている。さらに、その後、火山灰層に覆われた古墳等、これまでに全く気づかれなかった古墳が新たに発見されてきており、今では群馬県内にはかつて１万基に近い古墳が存在したものと考えられている。

このように、群馬県は日本の中でも有数の古墳分布県であり、しかもその内容も極めて優れたものであることからよく古代東国文化の中心地域と言われている。

ところで、３世紀末頃に畿内から瀬戸内・北部九州にかけて出現した古墳は、大和政権の支配が地方に及んでいく中で、４世紀末頃には西は九州から東は東北までに波及したと推測されている。

このような状況の中で、群馬県でも初めて古墳が造られたのは、４世紀中頃から後半とされている。この時期の古墳の分布を見ると高崎市、藤岡市、富岡市を中心とする西毛地域と前橋市から太田市にかけての県内の平野部に散在していることが看取できる。これはそれぞれの地域で小地域圏が形成されて、その中で首長層の成長があったことを示すものと思われるが、その出現の在り方をみると地域によって違いが認められる。富岡市北山茶臼山古墳、高崎市柴崎蟹沢古墳、榛名町本郷大塚古墳、玉村町軍配山古墳など円墳で出現するグループ、高崎市元島名将軍塚古墳、前橋市天神山古墳、同八幡山古墳、伊勢崎市華蔵寺裏古墳、太田市朝子塚古墳、同八幡山古墳、同矢場薬師塚古墳など前方後円墳や前方後方墳として出現するグループとに大別される。この古墳の出現の在り方の違いは、それぞれの小地域の有する歴史的背景の差と解されている。前者は弥生時代の伝統的地域であるのに対し、後者は古墳時代になって開発された新開発地域であったと考えられており、群馬県における古墳の出現は後者が主導的役割を果たしたものと推測されている。

これら出現期の古墳のうち、その内容が比較的よく判明しているのが前橋天神山古墳である。天神山古墳は全長126mを計り、後円部に長さ約９mにも及ぶ長大な粘土槨を有し、その中から銅鏡、碧玉製紡錘車をはじめ武器・武具類、農工具類など豊富な副葬品が検出された。この天神山古墳の規模や副葬品は他の古墳に比べ突出した感はあるが、総じて群馬県の出現期古墳の特徴を示している。すなわち、墳丘には未だ埴輪列の樹立をみず、内部施設は粘土槨を主体とする竪穴系石室を採用し、副葬品として銅鏡、鉄製武器・武具類、農工具類を納めている例が多い。銅鏡の中で特に注目されるのが天神山古墳、北山茶臼山古墳、柴崎蟹沢古墳から発見されている三角縁神獣鏡と呼ばれる日本固有の鏡である。この鏡は日本の古墳時代、とりわけ初期の大和政権の支配過程を知る上で貴重な資料であるが、現在までに群馬県からは11面発見されており、東国にあっては圧倒的な数を誇っている。

群馬県教育委員会，1995『群馬県の史跡』古墳編

朝子塚古墳（県）

指定年月日：昭和54年10月２日
所　在　地：太田市牛沢町1110-2ほか
指定面積：9,610㎡
整備状況：標柱・説明板設置、道標設置
出土品保管先：群馬大学、太田市教育委員会
交　　通：東武伊勢崎線太田駅から車で15分
（又は、東武バス太田―熊谷線高林十字路から徒歩20分）

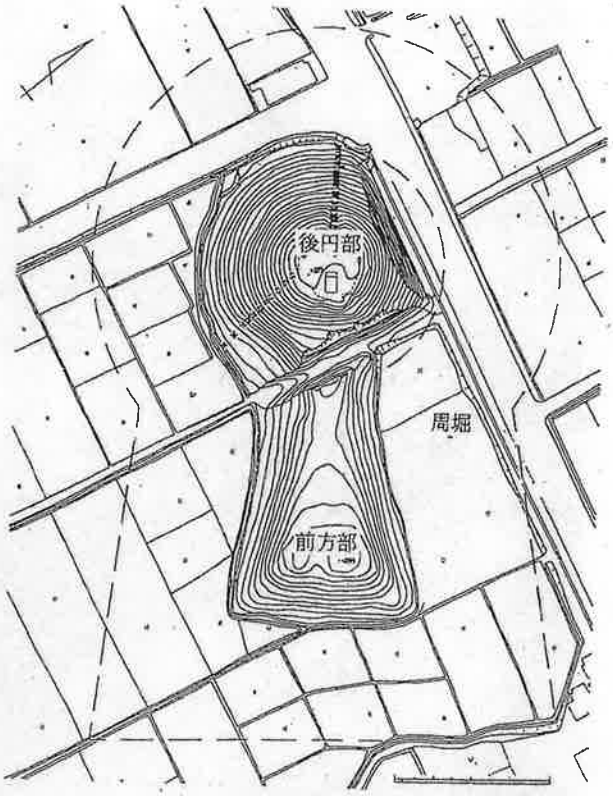
太田市南部の低台地南西端に築造された前方後円墳で墳丘の全長123.5m、後円部直径62m、高さ11.8m、前方部前端幅48m、高さ6.8mである。後円部に比較し前方部がきわめて低く細長い形を示す古式の墳形である。墳丘には川原石による葺石が全面に葺かれ、周堀は墳丘に沿って一周していると考えられている。

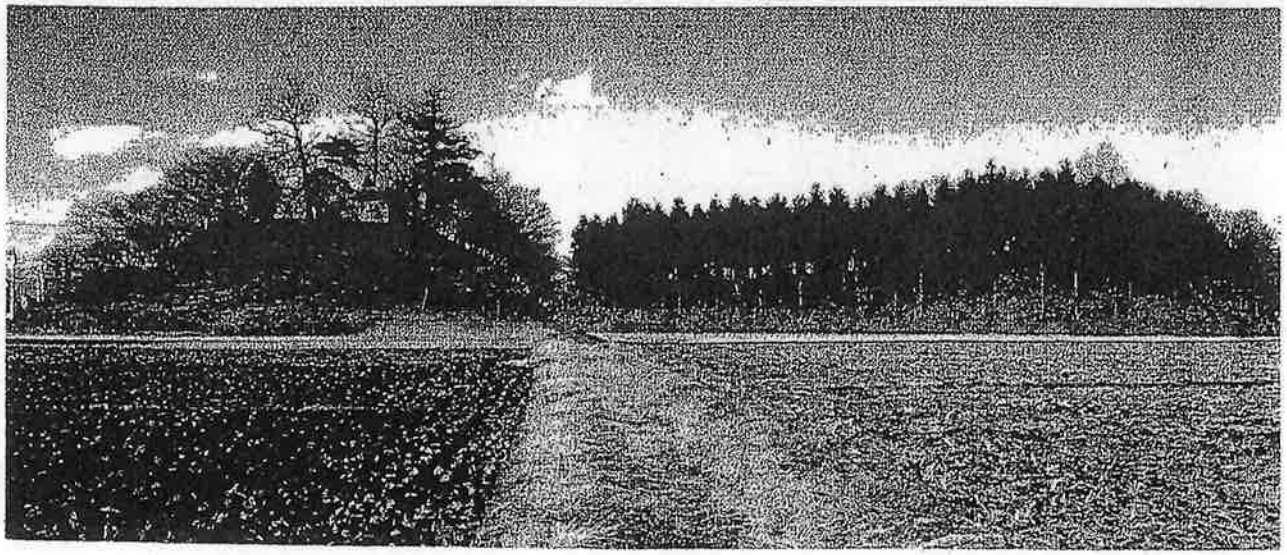
埴輪は墳丘裾部と中段部にめぐるほか、後円部墳頂には方形に大形円筒埴輪列が配され、その列中からは祖形の埴輪と見られる底に孔をあけた壺形埴輪が出土している。

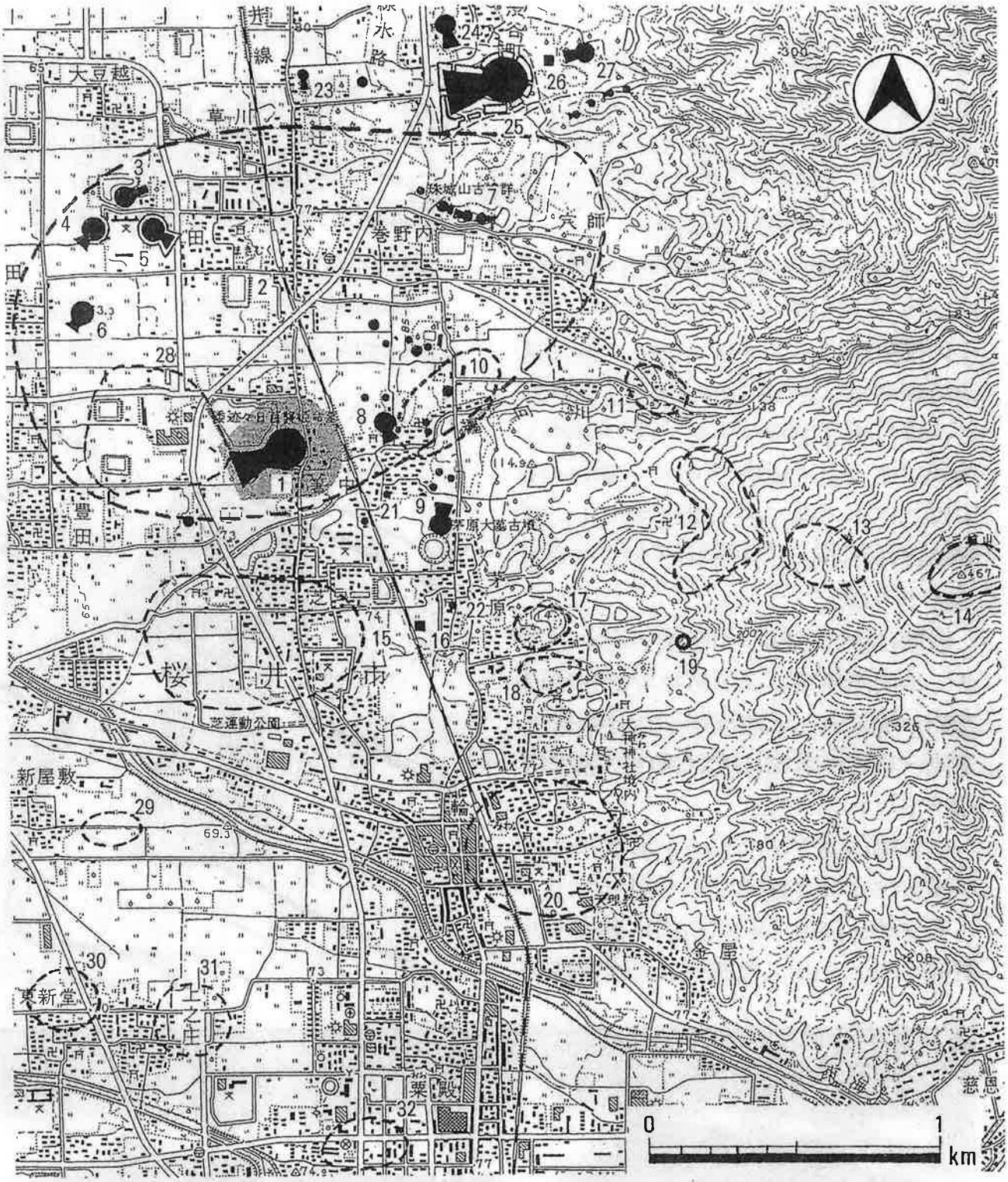
主体部は竪穴系のものと推定されるが構造等は未調査のため不明である。

西方約1.5kmにある石田川遺跡との関連も考えられ、現存する古式古墳の典型である。

築造時期は４世紀末から５世紀初頭頃と推定されている。　（吉田　誠）



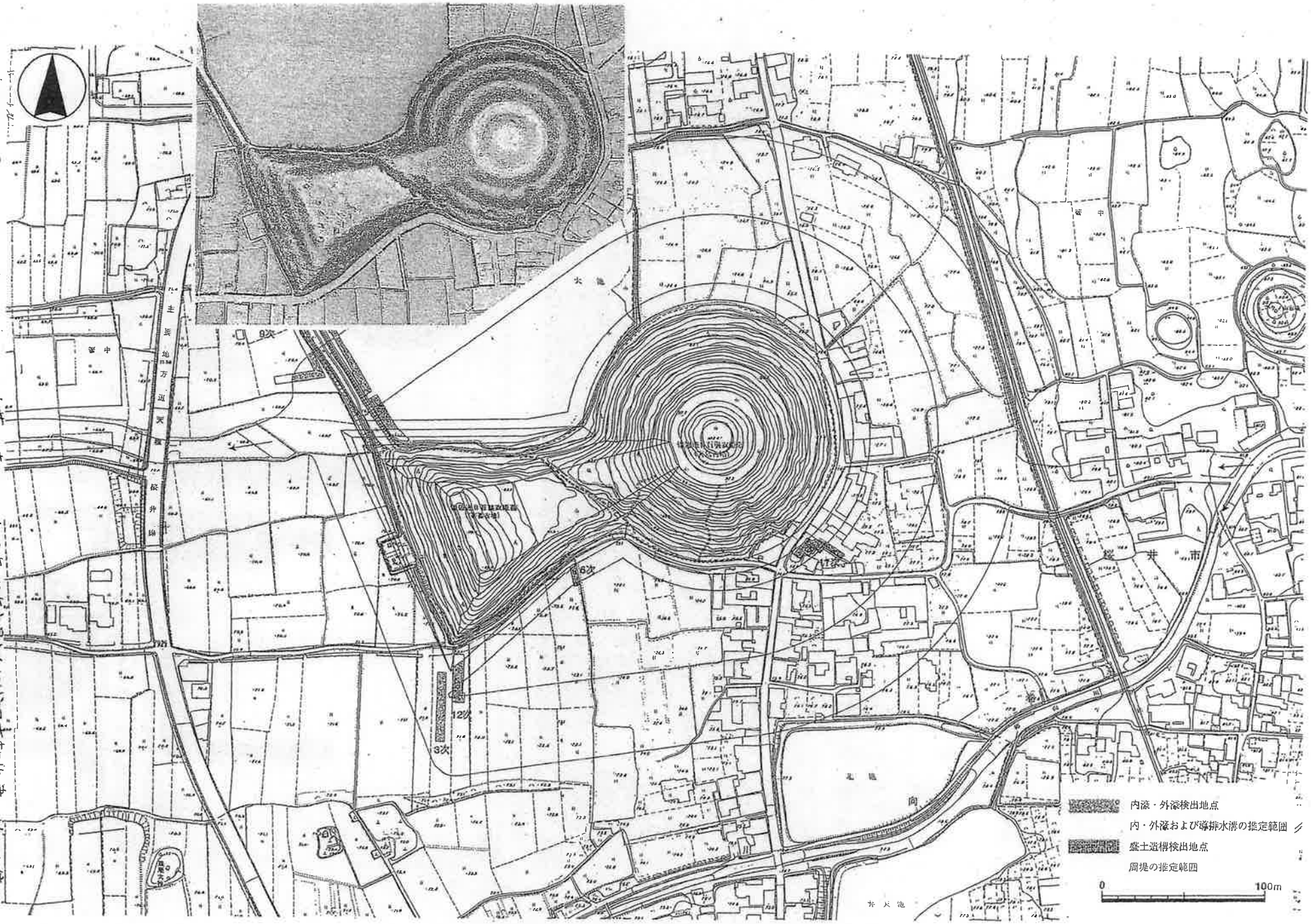




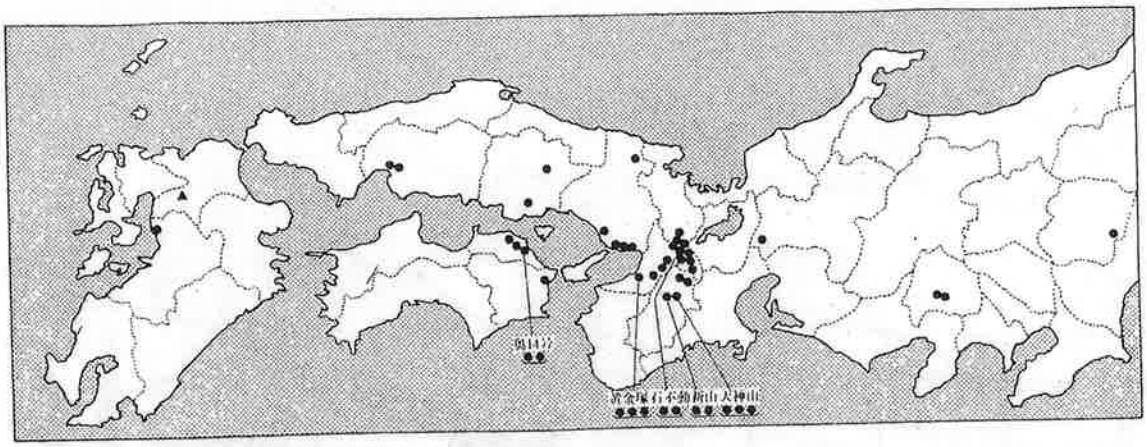
箸墓古墳周辺遺跡分布図

1．箸墓古墳　2．纒向遺跡　3．勝山古墳　4．矢塚古墳　5．石塚古墳　6．東田大塚古墳　7．珠城山古墳群
8．ホケノ山古墳　9．茅原大墓古墳　10．箸中古墳　11．車谷遺跡　12．辺津磐座　13．中津磐座　14．奥津磐座
15．芝遺跡　16．狐塚古墳　17．箕倉山遺跡　18．馬場遺跡　19．山ノ神遺跡　20．三輪遺跡　21．馬塚古墳
22．弁天社古墳　23．柳本大塚古墳　24．上ノ山古墳　25．渋谷向山古墳　26．赤坂古墳　27．シウロウ塚古墳
28．箸中西遺跡　29．新屋敷遺跡　30．東新堂遺跡　31．上ノ庄遺跡　32．粟殿遺跡

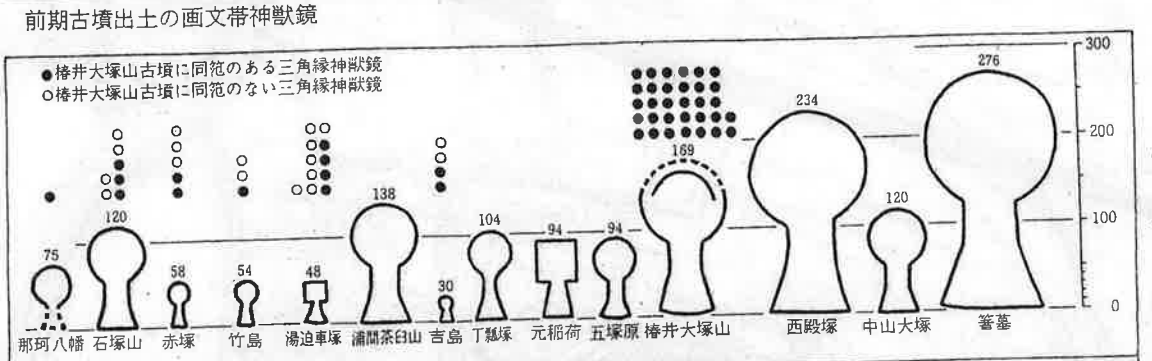
奈良県立橿原考古学研究所，2002『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書 第89集



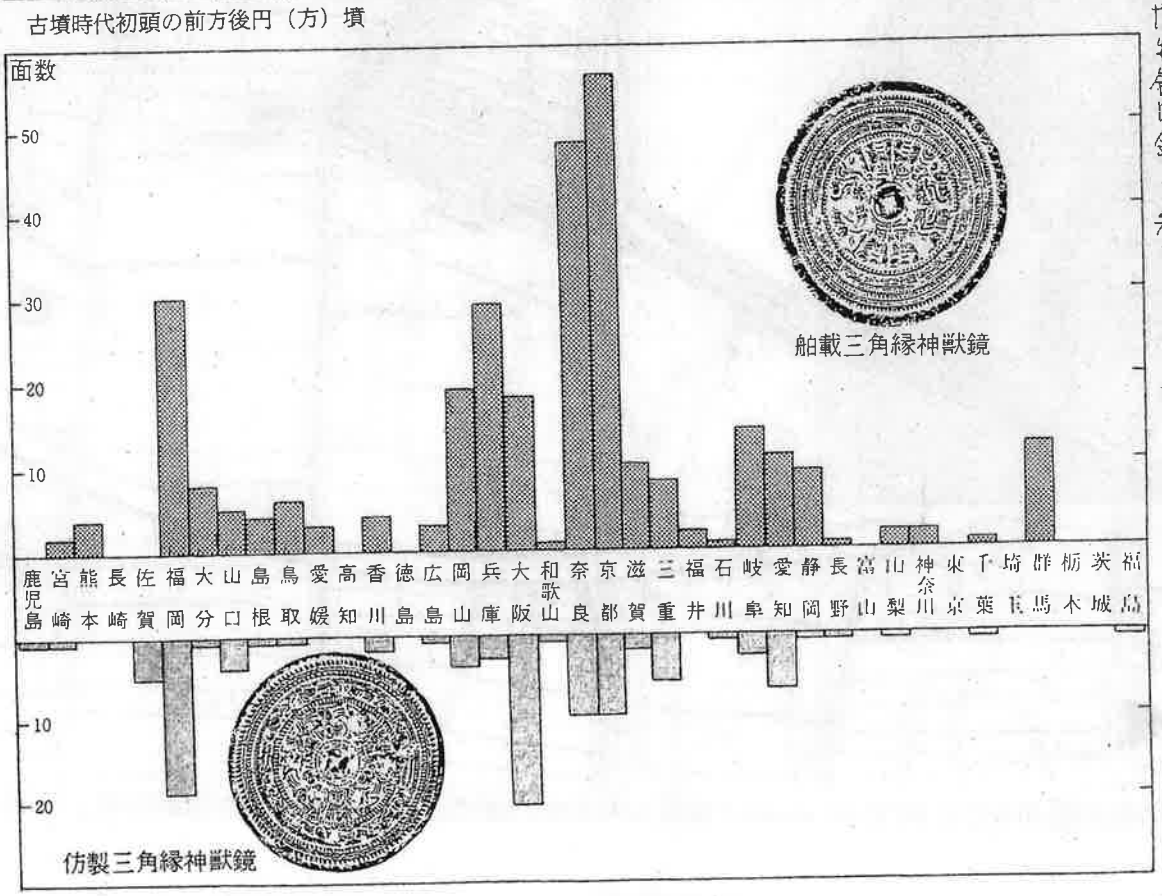
箸墓古墳に関わる調査トレンチの状況と築造プランの想定（2002年3月現在）



前期古墳出土の画文帯神獣鏡

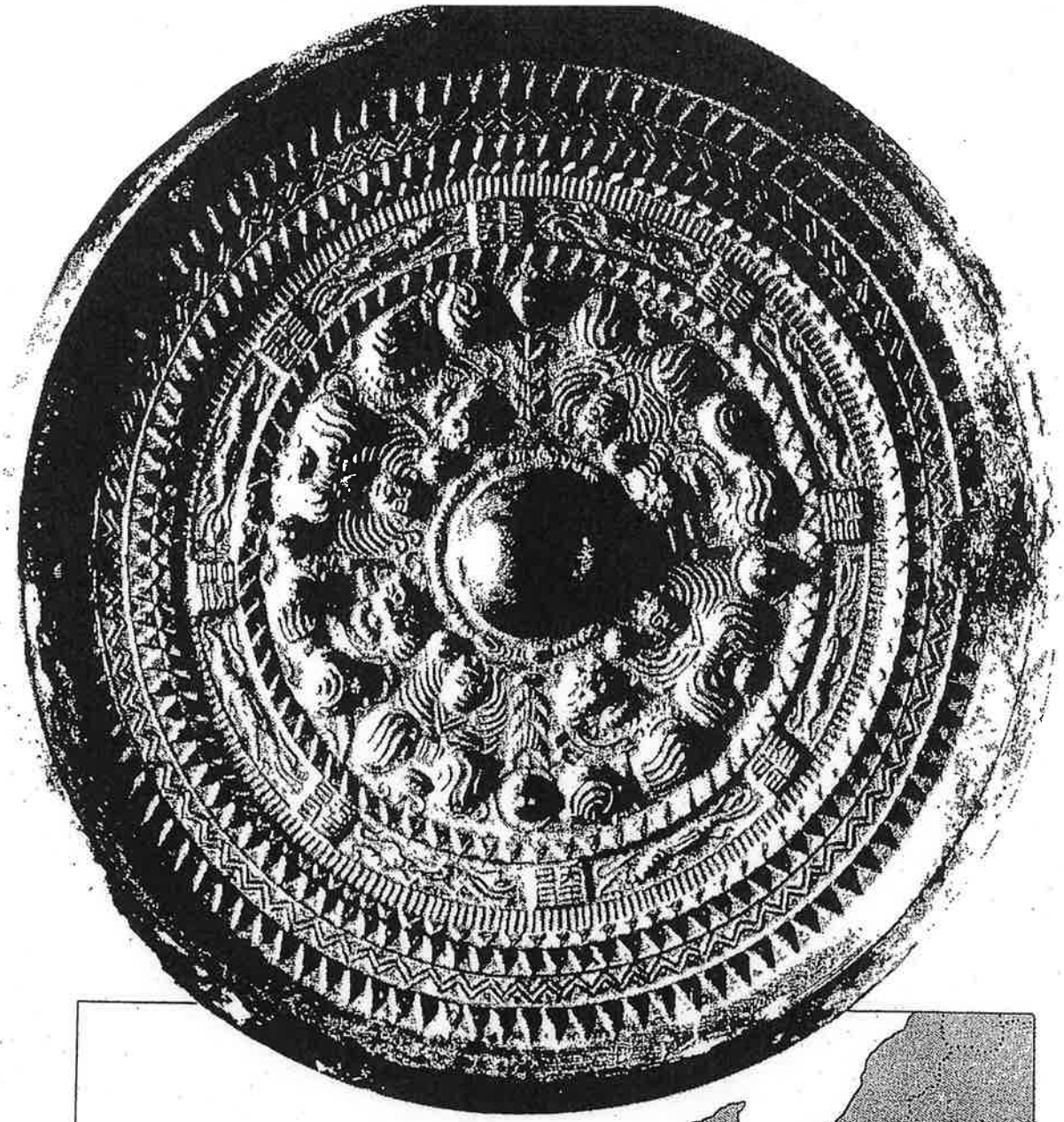


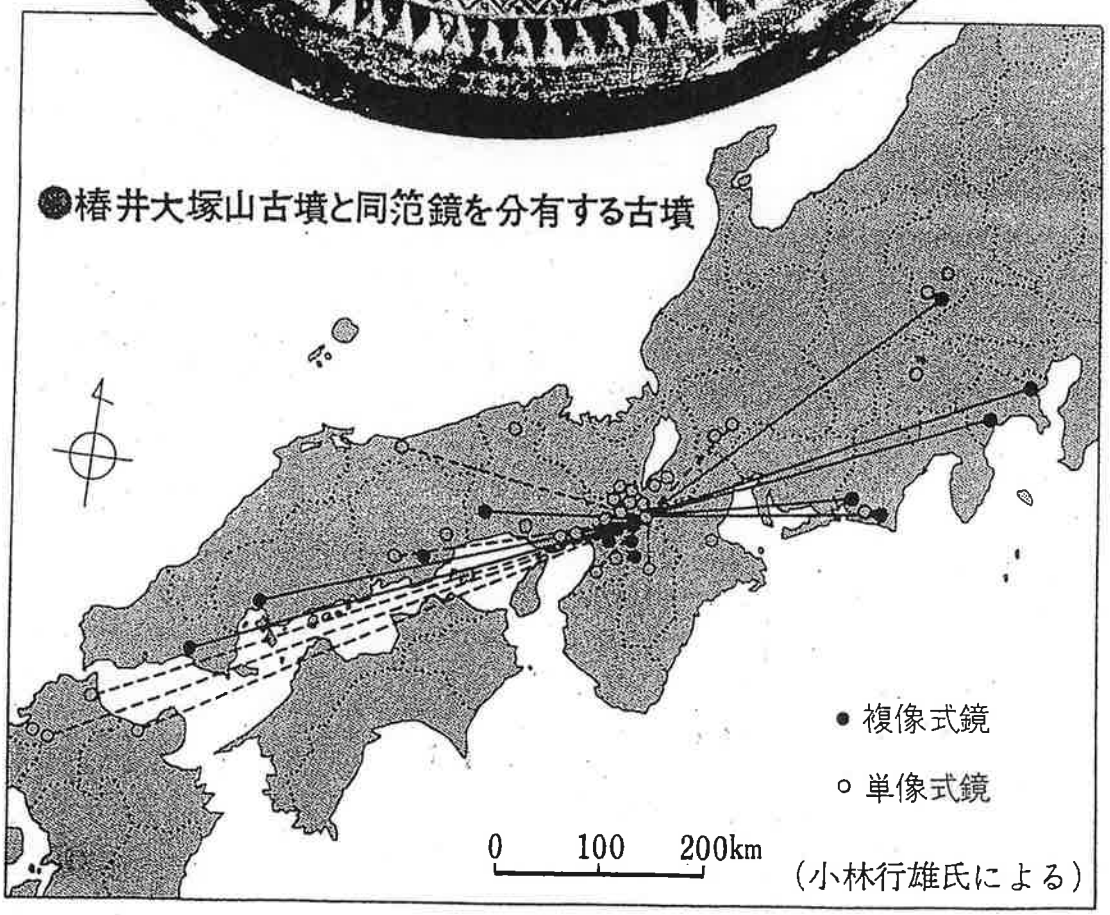
古墳時代初頭の前方後円（方）墳



三角縁神獣鏡の府県別出土数

京都大学文学部考古学研究室、一九八九 a 椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡 b 京都大学文学部博物館図録、京都大学文学部





（小林行雄氏による）

人物群像・日本の歴史 第1巻『古代の大王』1978 学研 による